

日本ジオパークネットワーク 正会員加盟申請書

「五島列島 大陸との懸け橋」

～大陸とのつながりを、大地・生態系・歴史文化から感じよう～



五島列島ジオパーク構想
GOTO Islands GEOPARK Plan

2019年4月
五島列島ジオパーク推進協議会



はじめに

五島列島は、九州の西方 100 キロメートルに浮かぶ大小 152 の島々からなる地政学的にも重要な国境の島です。

五島市は、五島列島の南西部にあって、11 の有人島と 52 の無人島で構成。島全体の景観は非常に美しく、その大部分が西海国立公園に指定されています。

気候は、対馬海流の影響を大きく受け、冬は暖かく夏は比較的涼しいといった海洋性の気候（西海型気候区）に属しています。島の周囲を流れる海流は、全国屈指の好漁場を形成し、四季を通じて様々な水産物が水揚げされます。また、肥沃な大地と温暖な気候は、農産物にとっても最適な環境で、ミネラルをたっぷり含んだ土壌が良質な作物を育てています。

ヤブツバキの自生数は日本一を誇り、弱酸性土壌で水はけのよい緩傾斜地の資質・地形は椿の生育に適しています。椿林の保全や活用にも取り組んでおり、2020 年には世界中の椿愛好家が集う「国際ツバキ会議・全国椿サミット五島大会」を開催します。

五島列島と中国大陆との関係は非常に古く、大陸から伝わった数多くの文化や風習が残されています。奈良及び平安時代初期には遣唐使船の日本最後の寄港地として利用され、その歴史は日本遺産「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」に認定されています。

昨年 7 月には、厳しい弾圧に耐え信仰を守り通した歴史を物語る「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録。久賀島の集落と奈留島の江上集落の 2 つが構成資産に含まれており、国内外から注目を集めています。

五島列島ジオパーク構想は、大学や民間の活動から始まり、機運の醸成とともに官民一体となった五島列島ジオパーク推進協議会の立ち上げにつながりました。協議会では、ジオサイトの調査・選定をはじめ、五島列島ジオパークの浸透を図るため、講演会やジオツアーなど、様々な活動に取り組んでまいりました。

本申請書には、これまでの活動と五島列島の貴重な自然遺産を保全しつつ、研究・教育を通して将来に継承していくための取り組み、そして日本ジオパークネットワークへの加盟に向けた“想い”をまとめています。

五島列島と大陸とのつながりを、大地・生態系・歴史文化から感じてください。

五島列島ジオパーク推進協議会 会長 野口 市太郎

目次

はじめに

A 基本情報

1. 申請地域の名称	1
2. 位置	1
3. 面積	2
4. 自然地理・人文地理学的特徴の概要	2
5. 運営組織	8
6. 連絡先（氏名、肩書、電話番号、メールアドレス）	11
7. ウェブサイト	11
8. SNS	11

B 提出書類一覧 12

C 地域の位置 13

D 主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素 14

E ユネスコ世界ジオパーク基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地質地形遺産及び保全	17
E.1.2 境界線	27
E.1.3 可視性（ビジビリティ）	27
E.1.4 施設・インフラ	28
E.1.5 情報、教育、研究	29

E.2 その他の資産

E.2.1 自然遺産	31
E.2.2 文化遺産	33
E.2.3 無形遺産	37
E.2.4 気候変動と自然災害への関わり	40

E.3 管理運営 41

E.4 重複（オーバーラッピング） 42

E.5 教育活動 43

E.6 ジオツーリズム 44

E.7 持続可能な開発とパートナーシップ

E.7.1 持続可能な開発に関する方針	45
E.7.2 パートナーシップ	47
E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加	47

E.8 ネットワーク活動 47

E.9 地質鉱物資源の販売 48

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応 48

F 日本ジオパーク認定を希望する背景と理由 49

【執筆者：五島列島ジオパーク推進協議会】

A 基本情報

1. 申請地域の名称

五島列島は、五島層群と呼ばれる約 1700 万年～1500 万年前に堆積した大陸由来の砂泥による堆積層が基となってできており、日本海拡大の影響による割れ目や、ねじ曲がった地層が記録されている。その後、マグマの貫入や火山の噴火により、火山地形や周辺の島々が形成され現在の地形となった。

また、五島列島は、九州の最西端に位置し、中国大陸に近いと、古代より大陸との交易や渡り鳥の中継地としても重要な位置にあった。自然地理的には福江島、久賀島、奈留島、若松島、中通島の 5 つの大きな島とその周辺の島々からなり、島々の地質や形成過程が一体的であり、生態系や歴史文化も共通している部分が多い。

一般的に中通島、若松島とその周辺の島々を上五島地域、奈留島以南を下五島地域と呼称し、それぞれ新上五島町、五島市という行政単位となっている。

申請地域は、五島列島全体のうち南西側の五島市の範囲とするが、将来的には新上五島町も含めた区域の拡大も視野に入れている。よって、申請地域の名称は「五島列島ジオパーク」とする。

2. 位置

長崎県五島市は、長崎市の西方海上約 100km に位置し、11 の有人島と 52 の無人島からなる。五島市役所の位置は、北緯 32° 41′ 44″、東経 128° 50′ 27″ である。



図 A-1
五島列島ジオパーク構想の位置

3. 面積

五島列島ジオパーク構想で定める地域は、五島市の区域のうち男女群島と肥前鳥島を除く陸域 415.5 km²と、その周辺の海域 528.3 km²（海岸線から 1 km の線を結んだ海域）で構成する総面積 943.8 km²の範囲とする。



図 A-2 五島市の全図（五島列島ジオパーク構想で定める区域）

4. 自然地理・人文地理学的特徴の概要

（1）地勢

申請地域は、大小の島々からなり、各島の西及び北側の海岸は、東シナ海の荒波を受け海食崖が連なり、特に大瀬崎の断崖、嵯峨島の火山海食崖は観光地としても有名である。また、福江島や嵯峨島などには、伊豆半島や萩に見られるような小型のスコリア丘をはじめ溶岩台地や盾状火山の火山群があり、福江火山群は気象庁により活火山に選定されている。

一番大きな福江島（326.3 km²）の中央部には、南北約 5 km、東西の最大幅 2 km の山内盆地があり、五島列島では珍しく平野が発達している。これは花崗岩の侵食盆地であり、盆地のまわりには熱変成を受けて固くなった堆積岩類が、侵食に耐え、七ツ岳（431.5m）などの急峻な稜線となってそびえている。

一番長い河川は、福江島にある一の川で 15.3km（長崎県内で 6 番目の長さ）あり、河口には干潟が広がっている。

海岸線の延長は 556.8km で、リアス海岸・溶岩海岸・岩石海岸と点在する白砂海岸など変化に富み、深い入江は天然の良港となり、魚類などの養殖の適地となっている。また、黒潮本流から分岐して北上する対馬海流と、列島付近にできる沿岸流との影響から魚の回遊が多く、西日本有数の好漁場を形成している。

島全体の景観は非常に美しく、昭和 30 年に西海国立公園に指定されている。

(2) 気候

五島列島の気候は対馬海流の影響が大きく、冬は暖かく夏は比較的涼しいといった海洋性の気候区（西海型気候区）に属している。年間平均気温は約 16.8℃で、年間降水量は 2335.8 mmとなっている。

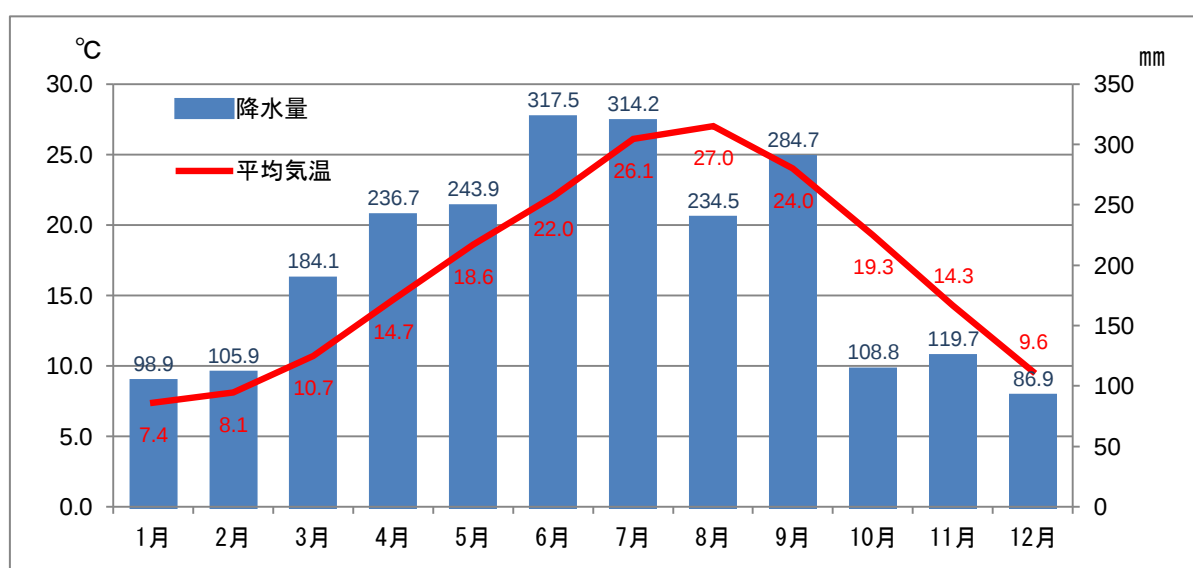


図 A-3 五島市福江の月別平均気温と降水量(統計期間 1981 年～2010 年)

(3) 生態系

五島列島は全域がヤブツバキクラス域（暖温帯）に入り、スダジイ林、タブノキ林などの照葉樹二次林が優占している。これらの二次林は、スダジイ、タブノキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、ヒサカキなどの照葉樹によって構成されている。五島列島では、島内に多く自生するヤブツバキを、主に椿実（ツバキ油の原料）の採取、防風林、薪炭材に利用してきた。

その他の植物では、対馬海流の影響を受けたヘゴ、ハマジンチョウ、アコウ、リュウビンタイ、ビロウ、サキシマフヨウ、ハマトラノオなどの南方系の植物のほか、ダンギクなどの大陸系の植物も生



写真 A-1 アコウ

育する。また、島内各地の灌漑用ため池には、オグラコウホネや五島列島が北限となるタヌキアヤメなどの水生植物や湿地植物が見られる。

この地域を代表する哺乳類としては、ニホンジカが福江島に見られる。また、ニホンイノシシは、明治末期に下五島地域からいったん絶滅したが、近年、上五島地域から下五島地域へ再侵入し、急速に生息域を広げている。

鳥類では、ハチクマなどの渡りのメインルートとなっているほか、カラスバトなどが繁殖している。

昆虫のうち蝶類では、台湾や東南アジアなどからリュウキュウムラサキやカバマダラが飛来する。さらに何種類かの迷蝶も見られる。

また、福江島には火山活動によって生じた溶岩トンネルがあり、この特殊な環境の中、日本では2か所しか発見されていないドウクツミミズハゼなどの魚類や固有種のイケザキアカヒラタゴミムシなどの昆虫類が生息している。海域では、各所で造礁性サンゴやソフトコーラルも確認され、大型の回遊魚も見られることから、スキューバダイビングの観察ポイントとして注目されているほか、アカウミガメの回遊が見られる。



写真 A-2 ハチクマ観察会

(4) 歴史

長崎県教育委員会が発行した「長崎県遺跡地図(1995)」によれば、下五島地域で旧石器時代の遺跡 9、縄文時代の遺跡 77、弥生時代の遺跡 19、古墳時代の遺跡 7 が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。五島における遺跡の立地的特性は、海岸部に集中することである。特に縄文、弥生時代の遺跡はほとんどが海岸付近に所在し、出土遺物は漁労生活に関わる遺物が大半を占める。稲作農耕社会となった弥生時代においても漁労の伝統が強く残り、新しい稲作社会への転換はあまり見られなかった。

また、縄文時代の遺跡では、明確な集落遺構が検出されておらず、数世代にわたっての定住ではなく、よりよい生活環境を求めて移住を繰り返したものと考えられる。

地質学的には、五島列島地域は縄文時代以降に沈降している（長尾ほか(1997)）ことが知られており、このことから五島列島の遺跡の多くが海岸部に残されている理由となっている。



写真 A-3 復元された遣唐使船

五島列島は、古代「値嘉島（ちかのしま）」と言われ、古事記や肥前風土記にも書かれている。現在の五島という地名になったのは平安時代末期の頃からで、当時日本へ渡航して来る中国人によって「五峰」あるいは「五島」と呼ばれるようになったと言われている。



写真 A-4 遣唐使船の寄港地 川原浦

五島列島と中国大陆との関係は非常に古く、奈良及び平安時代初期には遣唐使船の日本最後の寄港地として利用され、空海、最澄が乗った遣唐使船も唐へと渡る際、五島列島に立ち寄った。遣唐使制度廃止後も中国商船の博多、大宰府への中継地として国際的に重要な島であった。そうした五島列島の古代における歴史的経緯が評価され、平成 27 年 4 月には、いにしえより日本と大陸を結ぶ「海の道」の要衝として、日本遺産「国境の島 壱岐・対馬・五島 〜古代からの架け橋〜」に認定されている。

中世になると東シナ海周辺地域を中心に、倭寇が活発化するようになる。ある時は私貿易を行い、交渉が決裂すると海賊行為に及び、いわば半商半海賊的な性格を帯びていた。その海上拠点の一つとなったのが五島列島である。彼らは単に海賊行為を行っていたというわけではなく、通商を通じて独自の海上ネットワークを築いていた。彼らの築いたネットワークはやがて、大航海時代を迎えていた西欧諸国との接触をもたらし、そのことが、後の鉄砲伝来、キリスト教伝来に繋がっていった。

近世では、1797 年に五島藩が大村藩と移住の協定を結んで以降、大村藩領の外海地区から農地開発のための開拓民が五島列島各地へと移住してきた。そのほとんどが潜伏キリシタンであったと伝えられ、今日、彼らが移住して築いた集落の一部は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として、平成 30 年 7 月に世界文化遺産に登録されている。（五島市の構成資産は、「久賀島の集落」と「奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）」）。

幕末には、外国船対策として、日本最後の城である福江城（石田城）が築城された。かつては、城の三方を海に囲まれた、我が国でも珍しい海城であった。

（５）社会

申請地域の五島市は、平成 16 年 8 月 1 日に福江市、富江町、玉之浦町、三井楽町、岐宿町、奈留町の 1 市 5 町が合併して誕生した。

五島市は、「結集！！ みんなの力で五島を豊かに」を合言葉に、人と自然との共生を大切にし、安心と活力あふれるまちづくりを目指している。

平成 27 年度からの五島市総合戦略では、基本目標として次の 4 つを掲げている。

1. 五島の恵みを活かし、雇用を生み出す“しま”をつくる（良質な雇用の創出）
2. 五島の魅力を発信し世界に誇れる“しま”をつくる（交流人口の拡大）
3. 安全・安心で住みやすさ日本一の“しま”をつくる（まちづくり）
4. 五島の宝・子どもが育ち、輝く“しま”をつくる（子育て）

(6) 経済

五島市の就業人口の産業別割合は、平成 27 年の国勢調査によると第 1 次産業が 15.3%、第 2 次産業が 13.0%、第 3 次産業が 70.2%である。7 割を占めている第 3 次産業の中でも、医療・福祉、卸売・小売業、宿泊業、飲食サービス業の割合が高くなっている。

農業は、畑作が中心で、芋や麦、肉用牛、葉タバコが主管作物となっている。漁業は、一本釣り、はえ縄、定置網が経営の主体であるが、生産の主体であるまき網漁業も含めて減少傾向にある。なお、マグロ養殖の基地化が進められ、国内有数の産地となり今後が期待されている。

観光については、西海国立公園に代表される美しい景観や、世界文化遺産に認定された潜伏キリシタンの関連遺産、日本遺産に認定された遣唐使関連の歴史遺産をはじめ、様々な資源に恵まれており、これらを活かした観光やイベントの開催に取り組んでいる。平成 30 年は、7 月の世界遺産登録もあり観光客数は約 24 万人と増加し、観光消費額は約 86.7 億円となっている。

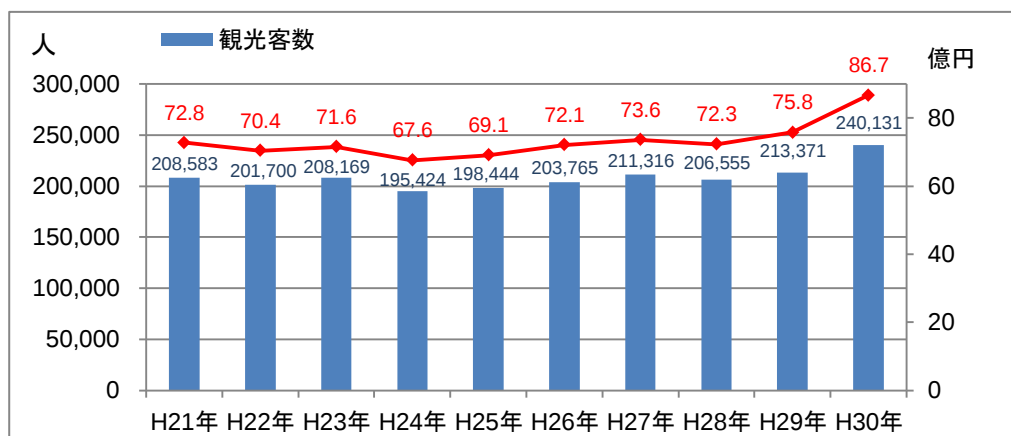


図 A-4 五島市の観光客数・観光消費額の推移

(7) 人口

平成 27 年の国勢調査によると、五島市の人口は 37,327 人、世帯数は 17,425 世帯である。人口は戦後のピーク時の 91,973 人（昭和 30 年）から減少を続けており、60 年間で約 6 割の減少となっている。また、高校卒業生の市外への転出などにより 20 代の若者が極端に少ない状況であり、高齢化比率も 36.8%と高くなっている。

そこで、各種人口減少対策に取り組んでおり、近年移住者の増加が顕著である。特徴としては、40 歳未満の比較的若い年代の割合が高くなっている（図 A-5）。

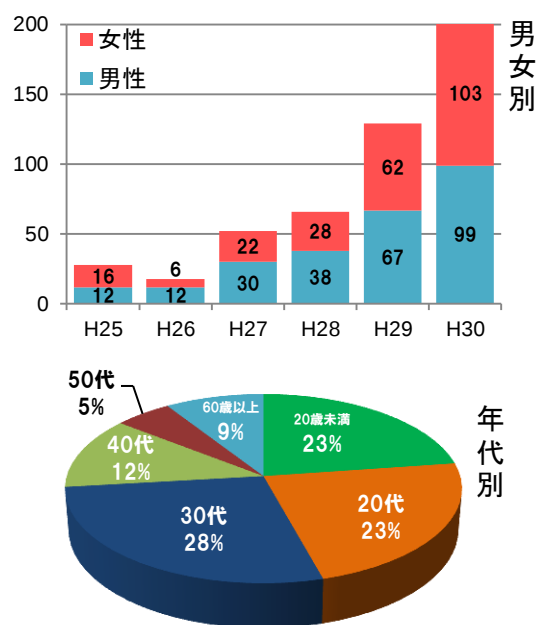


図 A-5 五島市への移住者の推移

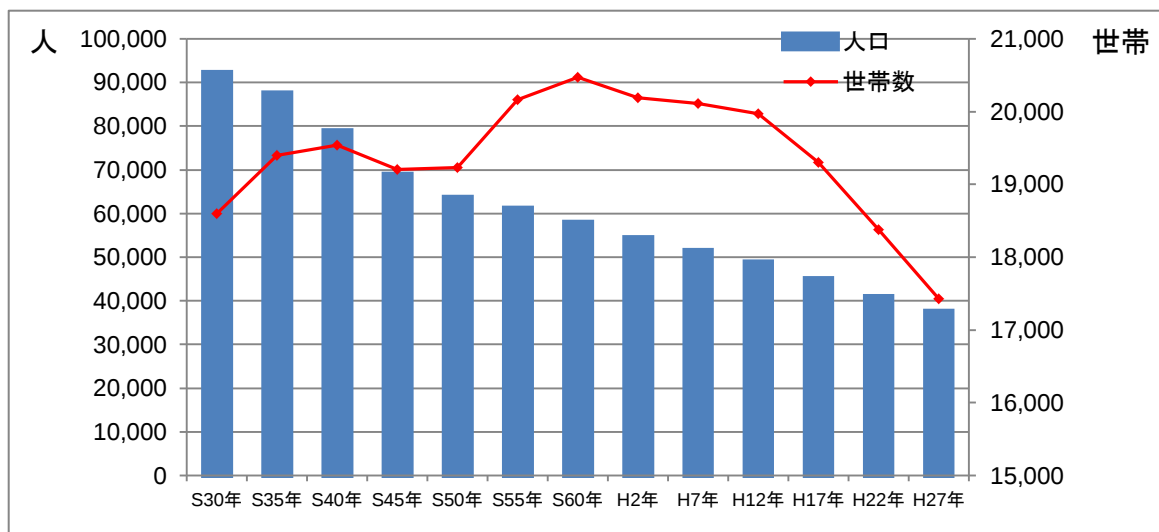


図 A-6 五島市の人口及び世帯数推

(8) 交通

五島市と九州本土をつなぐ交通網としては、空路及び海路で福岡及び長崎と結ばれている。空路では、五島つばき空港～福岡空港間を約 40 分、五島つばき空港～長崎空港間を約 30 分で結んでいる。海路では、博多港～福江港間をフェリーが約 8 時間半で結び、長崎港～福江港間をジェットフォイルが 85 分、フェリーが 3 時間 10 分で結んでいる。

また、申請地域内の交通網としては、福江島とその周辺の島を結ぶ定期船が運航し、福江島と奈留島では定期バスが運行されている。

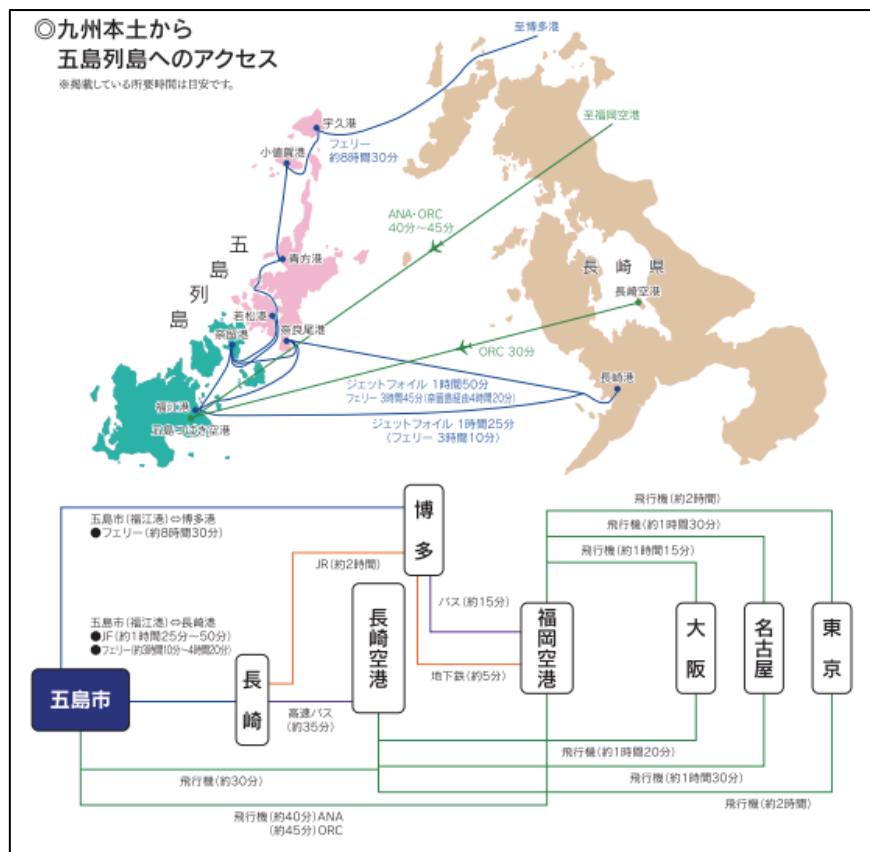


図 A-7 五島市へのアクセス

5. 運営組織

(1) 組織

五島列島ジオパーク推進協議会は、五島列島の自然遺産を保全しながら、研究・教育をとおして将来に継承していくとともに、その価値を高めジオツーリズムなどを通じた持続可能な地域社会の発展を目指して、平成 29 年 6 月に設立した。協議会には、多くの市民の理解と参画が必要であると考え、行政機関をはじめ関係団体、住民代表のほか、以前よりジオパークを目指した活動を展開していた民間団体も参画している。

事務局は、五島市政策企画課内に置き、事務局長、事務局員 4 人、専門員 1 人を配置している。

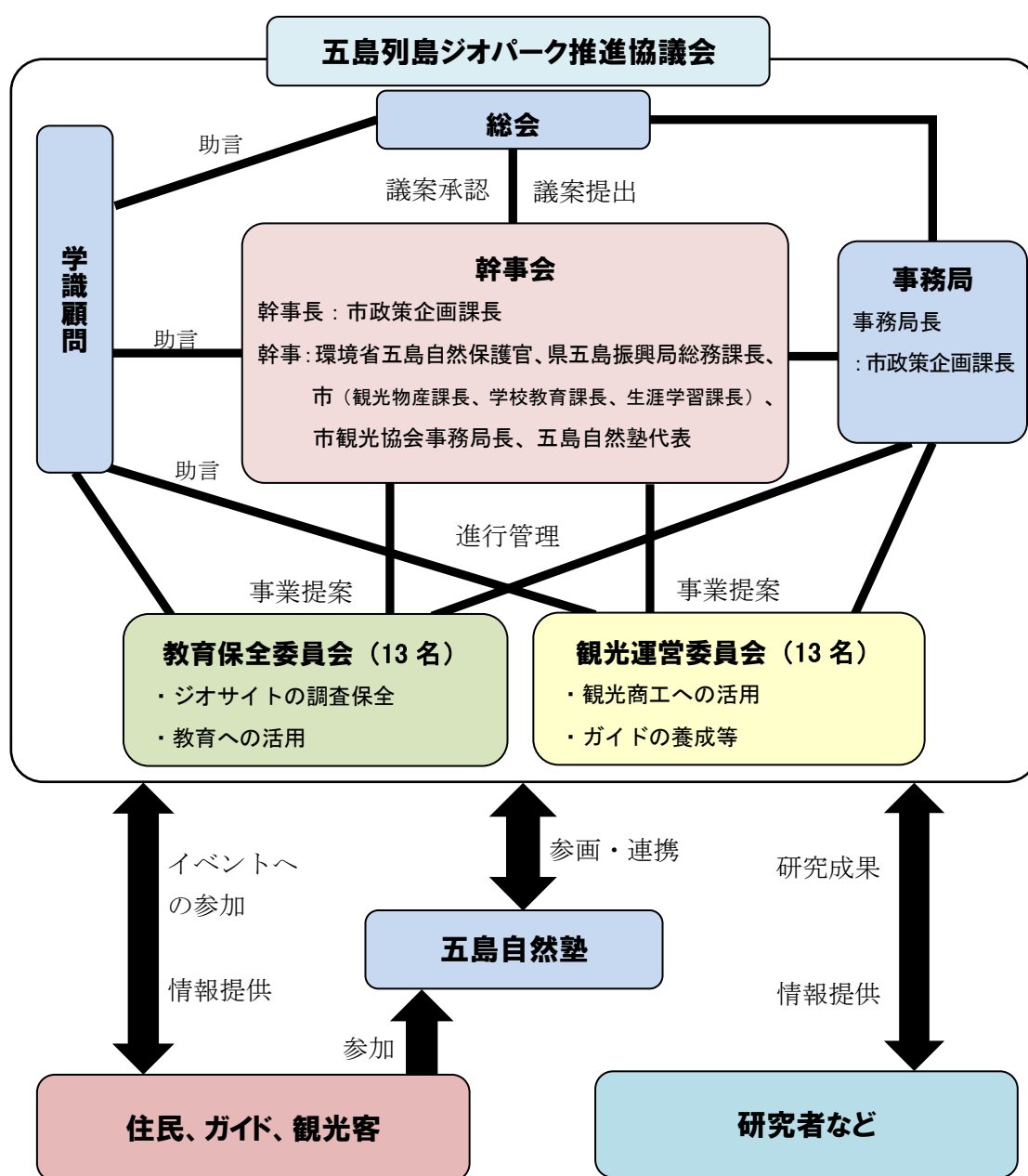


図 A-8 五島列島ジオパーク推進協議会の組織図

五島列島ジオパーク推進協議会会員名簿

平成 31 年 4 月

分野	団 体 名 ・ 役 職 名	教育保全委員会	観光運営委員会
商工 ・ 観光	福江商工会議所会頭		○
	五島市商工会会長		○
	(一社) 五島市観光協会会長 (五島観光連盟会長)		○
交通	五島自動車 (株) 代表取締役		○
	九州商船 (株) 常務取締役		○
	福江空港ターミナルビル (株) 代表取締役社長		○
教育 ・ 文化	五島市文化財保護審議会会長	○	
	五島文化協会会長	○	
地域 代表	おくら夢のまちづくり協議会会長	○	
	三井楽まちづくり協議会会長	○	
農協 ・ 漁協	ごとう農業協同組合代表理事組合長		○
	五島市漁協連絡協議会会長		○
民間 活動 団体	五島市おもてなしガイド連絡協議会会長		○
	五島自然塾代表	○	○
行政	九州地方環境事務所 五島自然保護官事務所保護官	○	
	長崎県環境部部長	自然環境課	
	長崎県五島振興局長	総務課	地域づくり推進課
	五島市長	政策企画課 観光物産課 鑑瀬ビジターセンター	政策企画課 観光物産課
	五島市議会議長		
	五島市教育長	学校教育課 生涯学習課	
	五島市総務企画部部長		
オブザーバー	新上五島町教育委員会文化財課長		
学識 顧問	九州大学大学院 理学研究院 地球惑星科学部門 准教授 清川昌一	専門家会議	
	九州大学大学院 工学研究院 環境社会部門 准教授 清野聡子	専門家会議	
	長崎大学大学院 水産・環境科学総合研究科 准教授 深見 聡	専門家会議	
	長崎県立島原高等学校 教諭 寺井邦久	専門家会議	
	長崎大学 名誉教授 中西弘樹	専門家会議	

科学面をサポートする専門家

	氏名・所属等	専門分野	サポート内容
学 識 顧 問	清川昌一（九州大学大学院准教授）	地質	学術的助言・支援
	清野聡子（九州大学大学院准教授）	海洋生態系	
	深見 聡（長崎大学環境科学部准教授）	ツーリズム	
	寺井邦久（長崎県立島原高等学校）	火山	
	中西弘樹（長崎大学名誉教授）	生態系	
	環境省五島自然保護官事務所		保全や活用
	長崎県環境部		の指導・助言

（２）これまでの活動の経緯

年月	できごと
平成 20 年 3 月 (2008 年)	「Project A 2008 in 五島列島」開催 (九州大学大学院准教授 清川昌一氏) 若手研究者が五島に集結
平成 25 年 5 月 (2013 年)	「五島の海岸と歴史散策」開催 (講師：九州大学大学院准教授 清野聡子氏) この活動が民間団体「五島自然塾」の設立へとつながる
平成 26 年 9 月 (2014 年) 9 月 10 月 10～12 月	五島自然塾が市民向け講座やシンポジウムを開催（3回） 五島文化協会が「石田城シンポジウム」を開催 五島自然塾が『ジオサイト候補地（案）マップ』作製 五島自然塾が西海国立公園 60 周年記念講座を開催 (計 7 回、講師：九州大学 清野聡子氏、気象庁 後藤進氏、五島自然塾 平田甚一郎氏)
平成 27 年 1 月 (2015 年) 2 月	・五島自然塾が講座などを開催（計 3 回、講師：九州大学 清野聡子氏） ・五島自然塾が講演会「五島列島をジオパークに！」開催 〔講師：長崎大学名誉教授 中西弘樹氏、九州大学 清川昌一氏、 島原半島ジオパーク 大野希一氏、九州大学 清野聡子氏、 五島自然塾 上田浩一氏〕
平成 28 年 5 月 (2016 年)	五島自然塾が『知らなかった！ 五島の自然』（48 ページ）を発行
平成 29 年 6 月 (2017 年) 6 月 8 月 9 月 10 月 10 月 11 月～	五島列島ジオパーク推進協議会設立総会 日本ジオパークネットワークに準会員として加盟 五島市広報で特集ページ掲載（表紙＋4 ページ） 市HPにジオパーク特設サイトを開設 講演会「ジオパークを知ろう！」（講師：天草ジオパーク 鵜飼宏明氏） 日本ジオパーク全国大会にてポスター発表 地域自慢放談会（第 1 回岐宿地区）開催 ※以降、岐宿地区…計 4 回、三井楽地区…計 3 回、富江地区…計 3 回、奈留地区…計 2 回、玉之浦地区…計 2 回 開催

平成 30 年 (2018 年)	2 月	講演会「三井楽の円畑と白良ヶ浜を科学する」 (講師：九州大学 清野聡子氏、他 2 名)
	3 月	講演会「地球の歴史と五島列島」 (講師：九州大学 清川昌一氏、他 4 名)
	3 月	「Project A 2018 in 五島列島」 (九州大学 清川昌一氏、他)
	3 月	体験ジオツアー「海と陸から見る富江のまち」開催
	4 月	広報紙「GOTO! ジオ通信」第 1 号発行 (9 月以降毎月全世帯へ配布)
	4 月	五島列島ジオパーク推進協議会総会で、テーマを決定
	6 月	ジオパーク専門員着任
	6 月	ロゴマーク公募 (6/1～7/2、応募総数 541 点) →10 月に公表
	8 月	講演会「奈留島の石を知ろう！」 (講師：東京都市大学自然科学科 准教授 萩谷宏氏、他 1 名)
	8 月	ジオサイトパネル展 (福江港ターミナル) ※年末年始にも実施
	8 月	嵯峨島ジオツアー「夏休み! 海と陸から嵯峨島を観察」
	9 月	ジオパーク学習会「北海道地震を学ぶ」
	9 月	第 1 回ジオガイド講習会 (第 2 回: 11 月、第 3・4 回: 1 月、第 5 回: 3 月)
	9 月	長崎県立五島海陽高校で出前授業「ジオパークって何だろう!」
	10 月	日本ジオパーク全国大会にてポスター発表
	10～11 月	五島市立盈進小学校で理科授業 (地層、岩石)
	11 月	講演会「ジオパークへの道」 (講師：九州大学 清川昌一氏)
	12 月	五島自然塾で第 1 回「ジオパーク学習会」 (1 月に第 2 回目を開催)
平成 31 年 2～3 月 (2019 年)		体験ジオツアー開催 (3 コース×各 2 回、五島自動車へ委託)
	3 月	第 5 回ジオガイド講習会&ジオツアー
	3 月	「奈留島ジオMAP」発行 (NPO 法人 DONDON 奈留)
	3 月	「嵯峨島クルーズ」開催 (五島市観光協会)
	4 月	五島列島ジオパーク推進協議会総会にて申請書提出を決定

6. 連絡先（氏名、肩書、電話番号、メールアドレス）

▽五島列島ジオパーク推進協議会事務局

▽電話番号：0959-72-6782

▽メールアドレス：kikaku@city.goto.lg.jp

7. ウェブサイト

五島列島ジオパーク推進協議会ホームページ

<https://www.city.goto.nagasaki.jp/li/island/010/010/index.html>

8. SNS

五島列島ジオパーク推進協議会 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/city.goto.geopark/>

B 提出書類一覧

1.申請書

2.申請書の添付書類

1.自己評価表

2.申請地域の地図

3.申請地域の地質学と地理学の概要

4.申請地域におけるジオパークと関わりのある文献リスト

5.ジオサイトリスト

6.ジオツアーの実績一覧表

7.その他

▽五島列島ジオパーク構想 基本計画

▽GOTO! ジオ通信

▽リーフレット

▽ポスター

▽主な新聞記事

▽知らなかった! 五島の自然 (制作: 五島自然塾)

▽奈留島ジオマップ (発行: NPO法人DONDON奈留)

▽指定文化財一覧表

C 地域の位置

長崎県五島市は、長崎市の西方海上約 100km に位置し、11 の有人島と 52 の無人島からなる総面積 420.1 km²の島々で、五島市役所の位置は、北緯 32° 41′ 44″、東経 128° 50′ 27″ である。

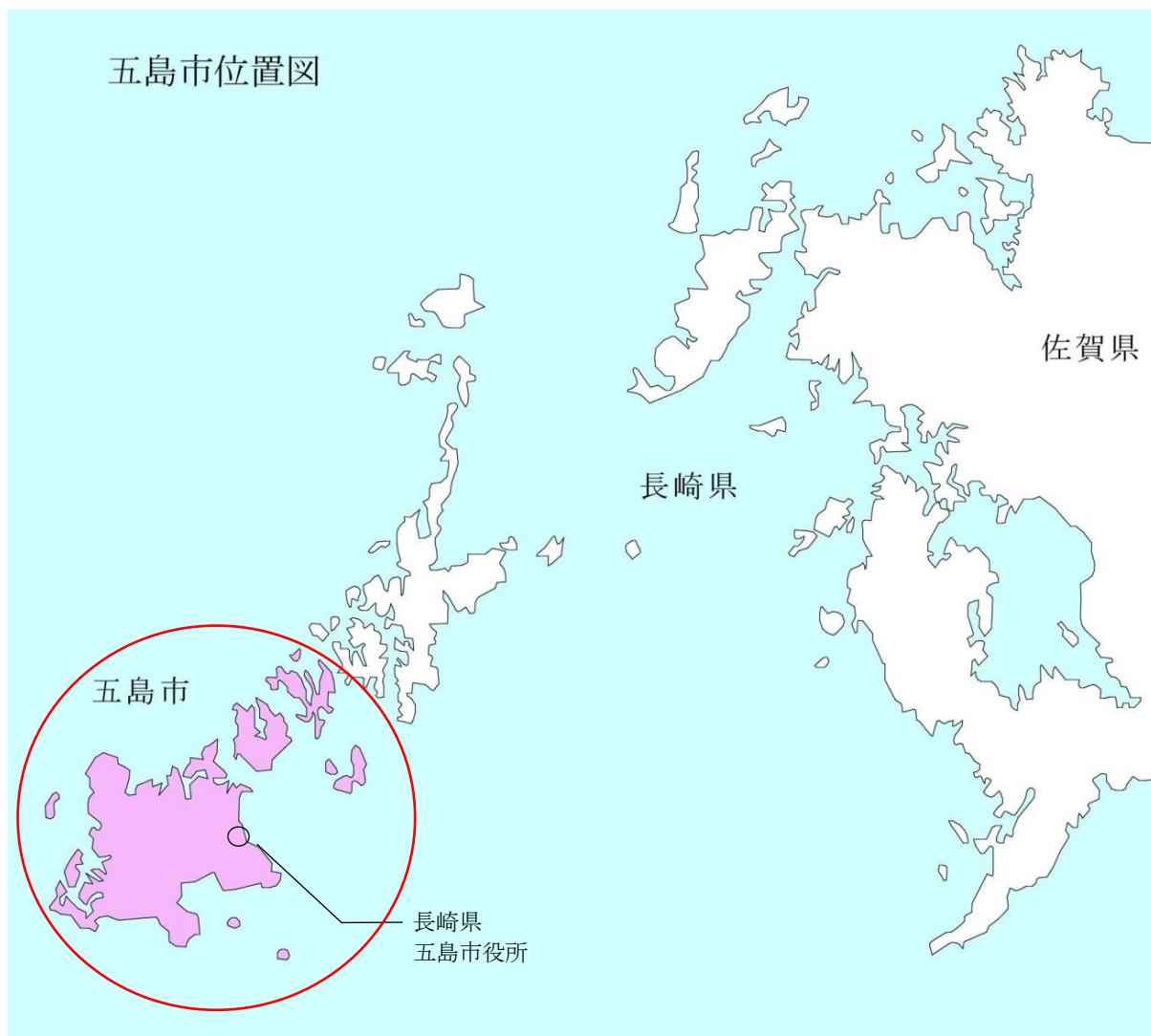


図 C-1 五島列島ジオパーク構想の位置

D 主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素

五島列島の地質地形学的な特徴は、大陸から流れてきた砂泥互層である五島層群と、その後の北東-南西方向の正断層沿いに起きた火山活動により島々ができていていることである。



D-1 大瀬崎

五島列島の最南部福江島の南西部に位置する大瀬崎断崖は、五島列島を代表する地質学的景観を有する場所である。ここでは、傾斜角度が浅い五島層群の砂泥互層が見られ、砂質部は淘汰が良く、珪長質の丸い粒からなり、クロスラミナが顕著に観察できる。

砂泥互層中には鉄質の径5～10cmのノジュールを含む。砂質部の砂の形成年代は約20億年前を示すものもあり、大陸の大河から流れてきたものと思われる。また、泥質部が黒みを帯びているのは、大河の流れ込みが少ない時に炭質物を多く含む地層が堆積したことによると思われる。

これらの砂泥互層は北西-南東方向への節理や断層が発達しており、玄武岩質の岩脈が平行に入り込んでいる場所も確認できる。これは五島列島が現在の主要な島々に分かれたときに、北東-南西方向の引っ張り力でできた割れ目に、その後、玄武岩質マグマが貫入したものである。

大瀬崎周辺は西海国立公園に指定されており、希少な植物であるシマシャジンやニシノハマカンゾウなどが自生し、玄武岩の貫入岩の一部は市の天然記念物に指定されている。さらに秋にはハチクマの中国大陆への渡りが見られ、毎年、観察会が開かれている。



写真D-1 大瀬崎五島層群中のノジュールの抜け跡



写真D-2 横縞は五島層群の砂泥互層、縦の黒みを帯びた線は玄武岩質貫入岩である。

D-2 ^{ぎょうがさき}魚津ヶ崎・^{たてこじま}立小島・^{とやのくび}登屋の首

福江島の北部海岸（魚津ヶ崎）では、北東-南西方向へと連なる五島層群の大きな傾斜の互層が顕著に見られる（写真D-3）。これは五島列島の基本的な構造であり、この構造は福江島の北方に位置する久賀島の北部「玄魚鼻」まで続く。ここでは、五島層群の上位を玄武岩質の溶岩が地形面の低い所に沿って流れていることが観察され、この玄武岩質溶岩の流れが結果的に外洋の波を防ぐ役割をして、遣唐使船をはじめとする交易船の風待ちの良港としても利用されていた。

魚津ヶ崎の西部に位置する登屋の首では、正断層が形成された時に五島層群が下に引っ張られて形成された褶曲構造が顕著に見られる。ここでは、大陸から渡ってきたワニと思われる大型動物の足跡化石（写真D-4）も見られ、堆積時の気候が現在よりも温暖で、湿地帯のような環境下であったと想像される。



写真D-5 登屋の首の五島層群の褶曲



写真D-3 立小島、切り立った五島層群と魚津ヶ崎の流入した溶岩



写真D-4 ワニの足跡化石

D-3 ^{おにだけ}鬼岳・^{あぶんぜ}鎧瀬海岸

鬼岳は福江島南東部に位置する単成火山である。鬼岳火山の噴出物は、カリウムが異様に多く、火山弾などに径2～3cmの斜長石を多く含むことが特徴である。

鬼岳周辺には（鬼岳を含む）11の火山が知られ、総称して「鬼岳火山群」と呼ばれている。約42万年前に噴火し、鬼岳火山群を俯瞰すると、第四紀後半の単成火山が五島列島の断層線に沿って噴火したことがわかる。

鬼岳火山群の直近の噴火活動は、 ^{14}C の測定により、約 18000 年前であることがわかっている。一方、最古の噴火活動の痕跡は、坂の上台地（中央公園市民体育館付近）のボーリング調査時に発見され、K-Ar 年代測定によって約 42 万年前との測定結果が出たが、その下部に火山活動があったかどうかは不明である。

鬼岳周辺の降下スコリア堆積物は、南に行くほど厚くなっているが（寺井 1989、長岡ほか 2004）、周辺では噴火口が確認できないため、鬼岳南の海岸近くの海中に噴火口があると思われる。このスコリア層は、 ^{14}C の測定により約 2300 年前と確認されていることから、鬼岳火山群を含む福江火山群は活火山（C ランク）とされている。

鬼岳は、西海国立公園に指定され、噴火口一帯が火山涙の産地として県の天然記念物にも指定されている。植生は、定期的に野焼きが行われ、全面的に芝生に覆われ、自然景観が保全されている。また、毎年 5 月 3 日に「こども自然公園大会」が開催されるなど市民の憩いの場となっている。

鑑瀬海岸は鬼岳の南方に位置する溶岩海岸で、 ^{14}C の測定により、約 18000 年前の噴火により形成された海岸である。鬼岳と鑑瀬海岸の中間地点の圃場整備した畑地の法面では、鬼岳からの火山灰が下の地形面に沿って堆積したことが観察され、溶岩と火山灰の関係がわかる（写真 D-7）。

鑑瀬海岸も西海国立公園に指定されており、五島列島の自然に関する拠点施設としてビジターセンターが整備されており、鬼岳の火山弾や島内の岩石、動植物の展示のほか、セツ岳登山会、鑑瀬海岸の観察会、大瀬崎のハチクマ観察会などを行っている。



写真 D-6 鑑瀬海岸



写真 D-7 鬼岳



写真 D-8 鑑瀬ビジターセンター



写真 D-9 火山灰の堆積状況が見える法面

E ユネスコ世界ジオパークの基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地質地形遺産及び保全

(1) 地質の概要

①日本列島と日本海の形成／大陸と五島列島の成立時の位置関係

今から約 2000 万年前、日本列島がユーラシア大陸から分かれはじめる際にできた低地に、ユーラシア大陸の大河からの土砂が流入し、堆積しはじめる。五島列島は位置的に大陸と九州の間にあったことにより、その土砂が堆積する場所であった（平朝彦 1990）。この堆積物の中の粒子には放射性年代で 20 億年を示すものもあることから（金子 M. s. 2018）、五島層群の砂泥互層は大陸から流れてきた土砂でつくられたことが分かる。その堆積した土砂が、やがて五島列島の地形・地質のもととなる五島層群となった。

②緑色凝灰岩の堆積

日本列島が大陸から離れ、やがて日本海になる地域が拡大するときに、その引っ張り力によって北東―南西系の正断層群が形成され、その後の火山灰の堆積や貫入岩などの活動の影響により、火山灰中の有色鉱物は水中で緑色に変色した。

また、火成活動に伴うマグマの熱水により日本海側の各地で金や銅を多く含んだ鉱脈が形成されたが、福江島西部の荒川地区や岐宿地区でも金鉱山の記録が知られている。



③五島層群堆積時の環境

ユーラシア大陸の大河からの土砂が堆積し始めた新第三紀は、五島層群中から発見される植物や動物化石群の分析結果により、この時代は現在の五島列島よりやや暖かい時代であったと考えられている（植田 1961）。

福江島東部の曲坂峠の五島層群からは、この時代（中新世）の植物化石群が発見され、奈留島では、同時代の地層からサイやワニの足跡が見つかり、さらに各地で漣痕が確認されている。

これらのことから、五島層群の堆積時代は現在よりやや温暖で、湖や湿地、海岸近くの低海拔の場所であったことが推定される。また、淡水棲の貝類が産出することから非海成の堆積物



写真 E-1
椎木山の漣痕



が広く分布していたことが分かる。中新世で非海成の堆積物が広く、厚く、分布することは日本国内では他に見られない。

図 E-2 舅ヶ島のサイの足跡化石

④五島層群以降の化石／堆積時の環境

岐宿の山内盆地の湖成層には高師小僧に伴って植物化石が出土し、柏の海岸では約 30 万年前の三井楽の溶岩台地の上の石灰岩中に海成貝化石を含む（江口吉昭 1969）。

このことから、気候的には現在と変わらず、海の近くであったことがわかる。

⑤火山の噴火

五島列島地域は、2 度の火山の噴火活動が認められる。1 度目の噴火活動は、新第三紀に日本海の形成に伴って生じた主に珪長質マグマの上昇によって、北東-南西方向に花崗岩類の貫入、噴火が起こった。この様子は、本申請地域の七ツ岳近辺、枕島、奈留島・ノコビで観測される。

また、2 度目の噴火活動では、第四紀後半に福江島で起きており、同様に北東-南西方向の推定断層に沿った玄武岩質マグマの上昇が各地で観測できる。この 2 度目の噴火活動により、岐宿、福江、富江では溶岩台地が形成された。三井楽では、なだらかな火山地形が作られた。

今日、これらの溶岩台地などは、五島の基幹産業である農業を支える農地として開墾されている。

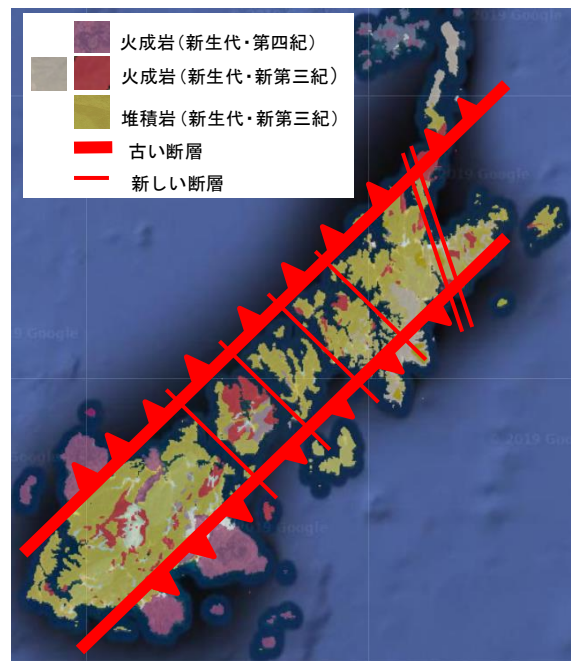


図 E-2 五島列島の地質図

（出典）産業技術総合研究所シームレス地質図を基に作成。断層線は、長嶋正彦（1969）を基に記入。

（２）地形の概要

五島列島地域は新第三紀後半までに、地質概要で述べたように北東-南西方向の断層により（図 E-2）五島層群が変形し、北西-南東方向の断層により現在の主要な島々へと分離し、五島列島の基本的な地形が形成された。

第四紀後半に入り、北東-南西方向に沿って約 74 万年前に岐宿で、約 30 万年前に三井楽

で、そして約2万年前までに福江、富江で玄武岩質マグマが噴火し、岐宿、福江、富江で溶岩台地（写真E-3）が形成された。また、三井楽ではなだらかな山容をした火山地形を作った。噴火活動により形成された海岸地形は、縄文時代以降本地域はやや沈降気味であり（長岡ほか 1997）、それらが他地域との大きな違いである。海岸線は一部でリアス海岸（写真E-4）を形成し、岐宿、玉之浦では天然の良港を作った。特に岐宿の魚津ヶ崎、白石湾（川原浦）一帯の深い入り江は、後の時代の遣唐使船や貿易船の寄港地として利用された。



写真E-3 岐宿溶岩台地



写真E-4 玉之浦御嶽山頂からリアス海岸を望む

地質区分			年代	五島の地質現象	五島列島のジオサイト	広域的な地質現象
新 生 代	第 四 紀	完 新 世	(万年) 1	福江火山 0.23	高浜海岸・頓泊海岸	縄文時代
		更 新 世	(百万年)	鬼岳噴火 0.018	鬼岳・鎧瀬	旧石器時代
			三井楽玄武岩 0.30	嵯峨島千畳敷、京ノ岳		
			岐宿玄武岩 0.74			
		2.58			氷期始まる	
	新 第 三 紀	鮮新世	(百万年) 5.33			気候温暖化
		中 新 世	23.03	北沖縄トラフの拡大 (東西方向の延び)、 北西－南東方向の 正断層 6 8	七ツ岳、奈留・ノゴビ	日本海拡大 15 20
				珪長質マグマ の貫入、噴火 12.0 14.5	枕島デイスait溶岩	
				北東－南西方向 北西落ち正断層 15		
				五島層群の堆積 15 17	奈留・宿輪、奈留・千畳敷、 魚津ヶ崎、六方、大瀬崎	

図 E-3 申請地域内の主な地質現象

(3) 申請地域の地質地形サイト

申請地域の地質地形サイトは、48 か所を選定している。このうち、大瀬崎、魚津ヶ崎・立小島・登屋の首、鬼岳・鑑瀬については、「D 主要な地質地形学的特徴とほかの要素」で記載しているところである。

ここでは、主な地質地形サイトとして8か所を説明する。その他の地質地形サイトについては、添付書類のサイトリストを参照されたい。

五島列島の地質地形の特徴は、新第三紀前半にできた五島層群と第四紀の玄武岩質火山群である。

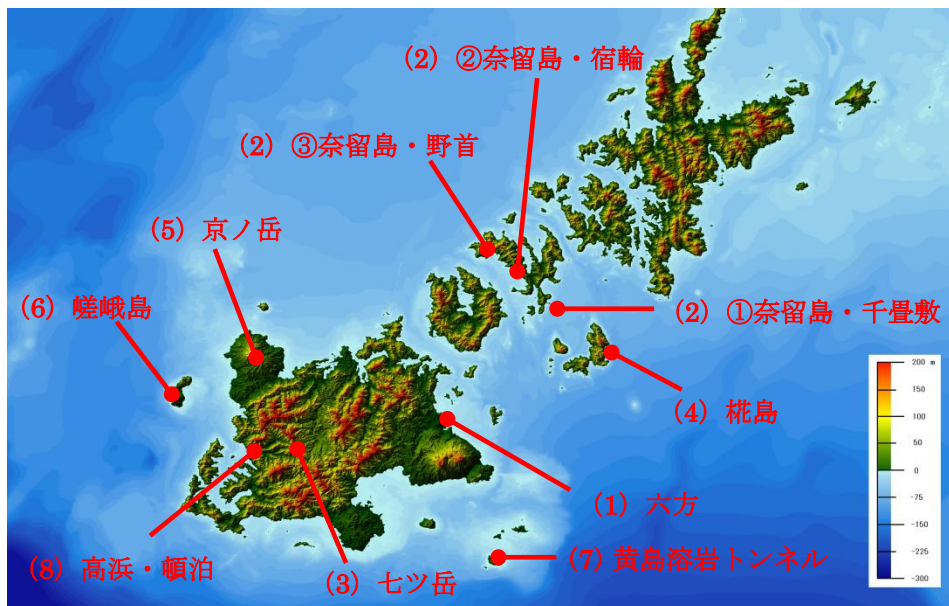


図 E-4 五島列島の地質地形サイト分布

【五島層群】

(1) ^{むかた}六方／五島層群堆積時の様々な表情

福江島東部に位置する六方（海岸）では、五島層群が堆積した環境が見られる。その後、五島列島ができる際の貫入・断層などの地殻変動の様子が分かり、そのほかにもノジュール、玉ねぎ状風化が見られる。

海岸付近には、五島層群に貫入する流紋岩質の 40cm 程の貫入岩があり、付近では凝灰岩質の砂岩と泥岩の互層も確認できる。泥岩は薄い茶褐色をしており、表面には火山豆石が散在する。これらはこの地層が非海成であったことを示している。付近では、黒味を帯びた砂層に径 10cm～15cm



写真 E-5 玉ねぎ状風化

のやや垂直方向に歪んだ球形の塊が散在する。外側が2～3cmくらい剥がれ、玉ねぎ状風化をうけている。砂の層が凝灰岩質なのでそこから溶け出した鉄分が、鉄質ノジュールを形成し、それが玉ねぎ状に(写真E-5)風化を受けたと思われる。海岸の入口から北側では、漣痕(れんこん)が見られる。砂岩層の中に木片があるが、珪質化していない。更に50m程北側には、5cm程の円礫を含む礫層の上に2～3m程のクロスラミナが見られる堆積岩の層があり、直ぐに落差10m程の正断層がある。断層は西落ちである(写真E-6)。断層の上位に0.5cm～2cmの白い軽石が散在する緑色火山灰層になる。六方で観察できる五島層群からは、日本海が広がる際の西の端の低地にユーラシア大陸から流れ込む土砂が堆積し、できた亀裂に流紋岩質のマグマが貫入した。そこに、正断層系の断層ができ、更に引っ張り力によってできた低地に水が溜まり珪長質の火山の噴火により降った火山灰が変質して緑色になった(写真E-6)と推定される。



写真E-6 断層と緑色凝灰岩層

六方海岸は、五島層群の様々な表情が観察される最適のジオサイトである。

(2) 奈留島

①千畳敷／五島層群上部の珪長質の貫入岩、淡水棲貝化石、大型動物の足跡



写真E-7 奈留島・千畳敷 サイの足跡化石

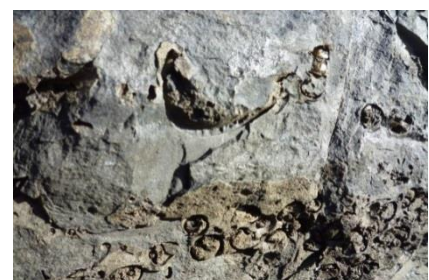
千畳敷は砂層が主の五島層群の互層からなり、幅1m程の流紋岩質の貫入岩や淡水棲貝化石層が見られる。小島に向かって左側にサイの足跡化石があり(写真E-7)その30cm程下の層準には径10cm程の石灰質ノジュールが砂層に散在する。

千畳敷より北2kmの兜崎にはサイとワニの足跡化石が見られる。千畳敷より北3kmの椿原にも同様の足跡化石が見られ、ノジュールも散在する。

ここでは、中新世の大陸の湿地帯の堆積環境であることが分かる。

②宿輪／五島層群中の淡水棲貝化石層

五島層群中の砂層の中に淡水棲の貝化石が密集して産する(写真E-8)。保存が良く2枚貝は2枚殻が合わさった状態で確認されることから、そこで生きていたことを示している。また淡水棲の貝化石層の存在から、ここが淡水域であることが分かる。この近く



写真E-8 淡水棲貝化石群

にもワニやサイの足跡化石が確認されており、五島層群のこの層準が非海成の堆積物であることが分かり貴重である。

市天然記念物に指定されている。

③野首（ノコビ）／北西-南東方向の断層と黒曜石

奈留島北西部に位置する野首では、珪長質の貫入岩や小さく割れ目の入った黒曜石の露頭が見られる。ここで見られる断層は、五島列島が主要な島々に分離する原因となった北西-南東方向の断層群のひとつである。珪長質の溶岩の中に黒曜石が見られる露頭は、日本では他にあまり例がなく、黒曜石の成因の解明に繋がる露頭である。この黒曜石の成分を分析した結果、市内の遺跡から出土した黒曜石器とは異なっていた。



写真 E-9 黒曜石の露頭

（３）七ツ岳／地下の酸性岩質マグマの上昇により水晶の結晶や流紋岩質の貫入岩

福江島中西部に位置する七ツ岳は、五島層群が地下の珪長質マグマの貫入によりホルンフェルス化し固くなり、侵食の影響をあまり受けずに残った結果、鋸歯状の山稜になったものである。頂上付近には珪長質の貫入岩が見られ、五島層群の隙間にはマグマの熱により晶出した水晶の綺麗な結晶が見られる。更に頂上付近から荒川方面を見ると直線的に切れており、断層の存在と荒川温泉がその線上にあることが推定される。これは五島列島ができたときに生じた北東-南西方向の断層群のひとつに沿って温泉が湧き出たものと思われる。



写真 E-10 七ツ岳から荒川を望む

このことは五島層群の堆積後、日本海の形成にともなって五島層群が引っ張られ、そこに珪長質岩が貫入し、断層も形成されたものと思われる証拠である。

（４）^{かばしま}杵島／デイサイト溶岩の柱状節理

福江島の東部に浮かぶ杵島では、100m 以上あるデイサイト溶岩の柱状節理が島内各地で見られるが、それは五島層群の堆積後に陸上で火山の噴火があったことを示している。そこには幅 2～3m の玄武岩質の貫入岩が見られるが、これは五島層群が堆積した後、北西-南東方向の正断層系の活動によるものと思われる。高さ約 150m 幅 1.5km に及ぶ（写真 E-11）。



写真 E-11 杵島の柱状節理

このように高い柱状節理が広く分布して見られる所はなく、貴重なものである。枕島のデイサイトはK-A rで約 1260 万年前となっている。珪長質の火山岩の噴火は福江島でも知られているが、そこで確認されるのは、五島層群堆積後の新第三紀に堆積した珪長質の溶結凝灰岩である。これも約 1240 万年前となっている（河田清雄ほか 1994）。

高さ 100m を超える柱状節理と空海の階段と呼ばれる玄武岩の貫入岩（地元では、「鷹ノ巣ガンギ」と呼称。「ガンギ」は階段のこと）は圧巻である。

玄武岩質火山の噴火

北東-南西方向の断層群に沿った噴火

（５）京ノ岳／玄武岩質の盾状火山

福江島北西部に位置する京ノ岳の山容は盾状火山を示し(写真 E-12)、日本の他の地域ではみることができない。約 30 万年前の溶岩であることがK-A rで知られている。噴火口は数か所あるものと思われ、単成火山である。

また、京ノ岳の裾野に広がる円畑の周囲に、溶岩トンネルも幾つか確認される。土壌化した火山灰土と不透水層となった溶岩層の間に水脈があり飲料水を提供している。

図 E-5 五島列島の地質図

（出典）産業技術総合研究所シームレス地質図を基に作成。断層線は、長嶋正彦（1969）を基に記入。

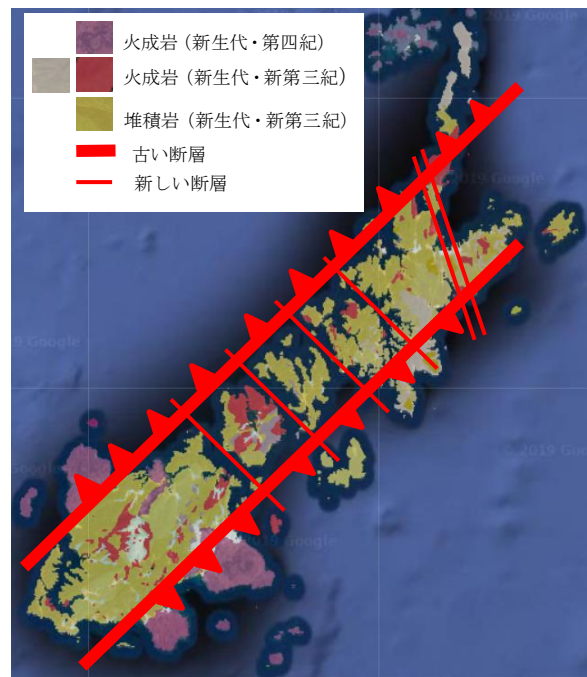


写真 E-12 京ノ岳盾状火山

(6) 嵯峨島・千畳敷

福江島の西方沖に浮かぶ嵯峨島は、男岳と女岳という2つの火山がつながり、一つの島になっている。島の西側に位置する千畳敷では、火山の噴出物が幾層にも堆積しているのが観察できる。そこでは乾裂(写真E-3)や火山からの噴石が堆積面に突き刺さっている様子(写真E-13)や、ある層準が乱れ、堆積中に地すべりなどがあつたことがわかる(写真E-14)。更に、断層や火山の噴出物が速い速度で流れた跡(火砕サージと思われる(写真E-15))が見られる。西側を海から見ると100m程の海食崖が見渡せ、火山噴出物の堆積の様子が見られる。ここでは火山の堆積状況がわかり、女岳の火口部分まで海により侵食されたことが分かる。



写真E-13 噴石が凝灰岩に刺さった様子



写真E-14 火山噴出物中の地層が割れた部分



火砕サージの跡

写真E-15 火砕サージの跡

(7) 黄島溶岩トンネル

福江島の南東部に浮かぶ黄島は火山活動でできた島である。島の南海岸には、玄武岩質の溶岩トンネルが海水面ぎりぎりのところにあり、トンネルの天井には黄鉄鉱の結晶が張り付き、保存状態が良好である。また、天井から溶岩鍾乳石が垂れさがり、側面には溶岩の流れた跡を観察することができる。奥には祠があることから、古くから黄島住民の崇敬地であった。



写真E-16 黄島溶岩洞穴の天井

白砂の海岸

（８）高浜海岸・頓泊海岸／自然地形をとどめた砂浜、砂丘、干潟



写真E-17 高浜海岸



写真E-18 頓泊海岸

福江島の北西には、西海国立公園の高浜や頓泊など、生物源の石灰質を多く含む白砂の海岸が広がる。その美しさは、透明度の高い海、背後の緑との組み合わせで絶景となっている。自然の砂浜や干潟がほぼ皆無となった日本で、景観保護上の理由で守られてきたこの地でこそその原形の観察が可能である。

砂浜と砂丘の微地形は砂が波で動き、風で飛ばされて堆積して出来ており、それに対応した生態系が存在している。高浜海岸では、写真E-17 をみると、1の砂丘、2の海岸植生、3の河口、4の細長く横に広がる水域、5の打ち上げ帯、6の沿岸砂州へと陸から海中までの連続性が確保されているのがわかる。伊能忠敬がその測量日記に「高浜、蛤の名所」と記したままで今に至るが、蛤の生息にはこのような微地形が不可欠である。

頓泊はさらに貴重で、遠浅の砂浜、干潟が広がっている。潮位や陽光や風で、時々刻々と色や姿を変えるこれらの自然海岸は、五島を代表する自然的景観となっている。

E.1.2 境界線

五島列島ジオパーク構想で定める区域は、五島市の地域のうち男女群島と肥前鳥島を除く陸域 415.5 km²と、その周辺の海域 528.3 km²（海岸線から 1 km の線を結んだ海域）で構成する総面積 943.8 km²の範囲とする。



図E-6 五島列島ジオパーク構想の位置

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

①横断幕、のぼり

島への観光客の入り口である福江港や五島つばき空港において、横断幕を設置している。また、公共施設や商店街にはのぼりを設置し、市民や観光客に対し、ジオパークの取組の機運を高めている。



写真E-19 横断幕（福江港ターミナル）

②解説板

ジオサイトでの解説板は、日英の2か国語で整備している。また、観光用の解説板が整備されているサイトでは、日英中韓の4か国語で表記している。

③ジオサイトパネル

平成 29 年（2017 年）11 月から、地域住民及び民間団体である五島自然塾と共同でジオサイトの掘り起しと解説パネルの作成を行っている。完成した解説パネルは、空港や港ターミナルのほか、講演会開催時などに展示している。

この他、GOTO! ジオ通信（全世帯配布）、リーフレット、ポスター、ホームページ、Facebook などによる情報発信を行っており、解説板以外は現状、日本語のみの対応である。



写真 E-20 ジオサイトパネル展

E.1.4 施設・インフラ整備

○銚瀬ビジターセンター

五島列島の自然を楽しく学ぶことができる施設として、平成 7 年に開館した五島市の施設である。五島列島の地質地形の成り立ちや、動植物、福江島の美しい景色を展示や映像で見ることができるほか、年間を通して各種の自然体験活動なども実施している。

なお、平成 31 年（2019 年）4 月より、五島市政策企画課ジオパーク推進班の所管となり、展示内容の全面的なリニューアルを予定している。



写真 E-21 銚瀬ビジターセンター

今後、五島列島におけるジオパークの拠点施設として、情報の収集と発信、体験講座の実施、研究者への支援などができる環境を整えていく。

①五島観光歴史資料館

五島観光歴史資料館では、五島の観光、歴史や文化、祭りや民俗行事などを分かりやすく展示、紹介している。その中で、五島の地質や岩石の展示もされており、その展示コーナーで、五島列島の成り立ちやジオパークとしての見どころを紹介する。

②福江港ターミナル、五島つばき空港ターミナル

海と空の玄関口である福江港ターミナル及び五島つばき空港ターミナルには、観光案内所が設けられており、ジオパークのリーフレットをはじめ、観光に関するパンフレットや各種資料が入手できる。

E.1.5 情報、教育、研究

(1) 一般向けの情報提供

一般向けの情報提供については、解説板、リーフレット、ポスター、ホームページ、Facebook などによる情報発信のほか、下記の取組を行っている。

①ジオサイトパネル展

地域団体の五島自然塾や地域住民と共同で、ジオサイトの掘り起しと解説パネルの作成を行っている。パネルの作成にあたっては、各地区で地域自慢放談会を開催し、地域住民の意見を取り入れ、わかりやすい解説に努めている。完成した解説パネルは、空港や港ターミナルのほか、講演会開催時などに展示している。

展示に関するレイアウト決めや設置作業に関しても共同で実施しており、広報活動にも協力して取り組んでいる。

また、解説パネルに投票するような工夫（「行ってみたいジオサイトに投票」）を施すなど、参加型の展示を行っている。展示は開催するごとに改善が行われ、より良いものになってきている。



写真E-22 観光客が投票する様子

②GOTO! ジオ通信

平成30年（2018年）4月から、地域住民向けの、活動報告を目的とした広報紙「GOTO! ジオ通信」を発行している。

発行は月に1度、五島市の町内会加入世帯（約16,000世帯）に配布を行うほか、市役所窓口への設置、五島列島ジオパーク推進協議会のHPやFacebookでも公開している。

なお、ジオ通信では、活動報告に合わせてイベント開催のお知らせや見どころの紹介も行っている。



写真E-23 GOTO! ジオ通信

(2) 教育プログラム

協議会では、小学校での理科教育及び高等学校でのふるさと学習、ビジターセンターでの野外観察会、公民館講座などに取り組んでいる。

五島市立盈進小学校では、6年生の理科の「地質」の時間に、ジオパーク専門員による指導で学校近くの海岸での地層観察を行った。また、「岩石」の時間には、かつて整備さ

れ荒れ果てていた校庭の岩石園を整理し、岩石の判別調査などの授業を行った。

これがきっかけとなり、6年生が卒業制作として岩石の新しいネームプレートを作成し、校庭の岩石見本園が復活した。

(平成30年度)

この盈進小学校での取組をモデルとして、今後他の学校へ展開していく。

五島海陽高校では、「ふるさとの未来を担う高校生育成事業」の一環として、もっと地元を知ってもらおうと、ジオパーク活動に関する出前講座を開催した。(平成30年度)

社会教育活動における取組としては、公民館講座などで五島列島の成り立ちやジオサイトの解説、体験ジオツアー、既存のイベントと連携した事業などを行っている。

また、五島自然塾と連携し、各地区(旧町)に自然や文化に関心のある住民が集まった「地域自慢放談会」を開催している。地域自慢放談会では、住民から地元の風習や生活の知恵などが語られ、地質や地形との結びつきが説明できる場面もあった。これらの情報は、ジオサイト候補地の解説パネル作成に活用している。



写真 E-24 小学校での授業



写真 E-25 観察会の様子

(3) 実施又は協力している研究

五島列島の地質や地形とこれらに関連する自然や文化を調査・研究する研究者に対して、現地案内をはじめ、旅費や謝金の支出などの支援をしている。

また、現地調査の際は、研究成果の住民への還元を目的に、講演会などを開催し、地元の資源にどのような価値があるのか、地域住民に関心を持ってもらうような取組も行っている。

E.2 その他の遺産

E.2.1 自然遺産

申請地域にある自然遺産としては、次のものがある。

▽自然公園法

- ・西海国立公園（昭和 30 年 3 月 16 日指定）

▽指定文化財（天然記念物）

- ・ヘゴ自生北限地帯（国指定天然記念物、大正 15 年 10 月 27 日）、
奈留島権現山樹叢（国指定天然記念物、昭和 33 年 3 月 11 日）、
五島檜の浦のアコウ（県指定天然記念物、昭和 27 年 5 月 13 日）など、計 30 件

▽長崎県未来につながる環境を守り育てる条例

- ・鑑瀬海岸県自然環境保全地域（昭和 51 年 12 月 17 日指定）など、計 4 地域

この中で、特に見どころである 3 つのサイトを紹介する。



図 E-7 主な自然遺産の位置

（１）大瀬崎／ハチクマの渡り

福江島は、秋にハチクマをはじめとする渡り鳥の中継地として知られている。

渡りをするタカの一種ハチクマは、夏に日本で繁殖し、西へ西へと移動し、その大部分は福江島の大瀬崎周辺から西海上に飛び出し、2～3 日かけて東シナ海を越え、大陸へ渡っている。

この時期の福江島では、安定した北東風が吹くことが多く、ハチクマはこれを利用していると考えられている。

これまで、9 月中旬から 10 月上旬に 7000 羽～20000 羽が記録されており、日本最大の渡りの中

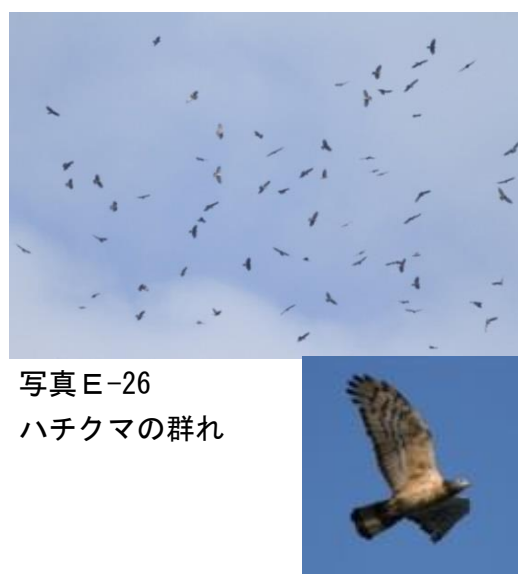


写真 E-26
ハチクマの群れ

継地になっている。

植物では、世界で3か所（大瀬崎、平戸島、済州島）しか自生していない希少なシマシヤジンが生育している。

（2）^{はっさくばな}八朔鼻／海岸植物の宝庫

八朔鼻の海岸は、玄武岩の黒い岩がテラス状の平らな地形を作り、砂の道や塩性湿地が混在するなど、多様な環境が保たれている。この海岸には、ヒメハマナデシコ、ハマサジ、スナビキソウ、ゲンカイミミナグサなどの希少な植物が見られるほか、グンバイヒルガオなど対馬海流に運ばれる南方系種子も発芽しており、この狭い範囲に長崎県で見られる海岸植物の約3分の1が生育している。



写真E-27 八朔鼻の海岸

平成25年10月に県の天然記念物「五島八朔鼻の海岸植物」に指定された。



写真E-28 ヒメハマナデシコ



写真E-29 ハマサジ

（3）溶岩トンネルに生息する生物

福江島周辺の溶岩トンネルには、洞窟に生息する生物が見られる。井坑は、ユビナガコウモリ、モモジロコウモリなどのコウモリの越冬場所になっており、他にも固有種のゴトウメクラチビゴミムシをはじめヤスデ類やクモ類など学術上貴重な洞窟生物が生息している。

その中でも、昭和48年に発見されたドウクツミミズハゼ（ミミズハゼ科）は全国的にも希少な生物で、絶滅危惧種に指定されている。



写真E-30 溶岩トンネルで発見されたドウクツミミズハゼ
（写真提供者：深川 元太郎 氏）

E.2.2 文化遺産

申請地域にある文化遺産としては、次のものがある。

▽指定文化財（文化的景観、有形文化財、名勝、史跡）

- ・五島市久賀島の文化的景観（国選定重要文化的景観、平成 23 年 9 月 21 日）
- ・江上天主堂（国指定重要文化財、平成 20 年 6 月 9 日）、
旧五輪教会堂（国指定重要文化財、平成 11 年 5 月 13 日）など、有形文化財 16 件
- ・三井楽（みみらくのしま）（国指定名勝、平成 26 年 10 月 6 日）など、名勝 2 件
- ・寄神貝塚（県指定史跡、昭和 37 年 11 月 8 日）など、史跡 23 件

このうち、五島市久賀島の文化的景観と江上天主堂、旧五輪教会堂は、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の要素であり、三井楽（みみらくのしま）は日本遺産「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」の構成資産となっている。

五島列島の人々は、生活・生業を営む上で、五島列島の地質・地形が成り立つ過程で形成された特異な地形を巧みに利用し、独特の生業空間を造り上げてきた。

また、古代より大陸や朝鮮半島との交易が行われており、多くの関連史跡が残されている。これらのことがわかる主なサイトを 4 つ紹介する。

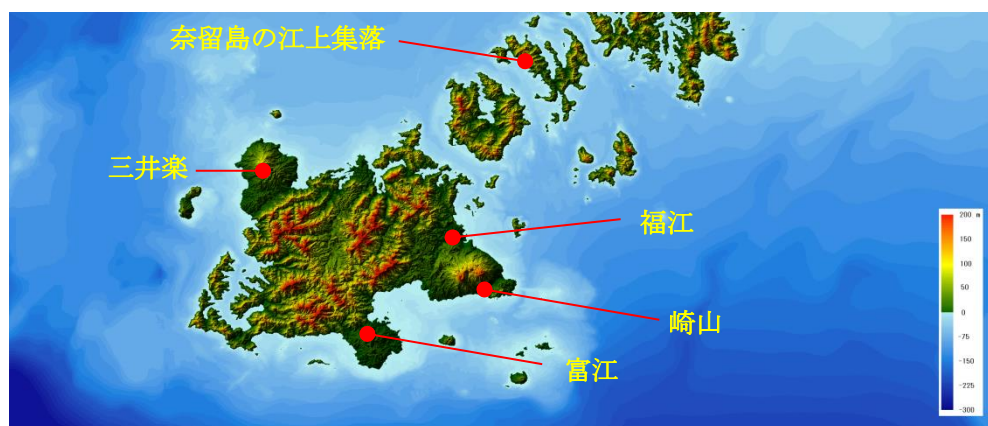


図 E-8 主な文化遺産の位置

（１）福江島（三井楽・富江・崎山）の^{まるはた}円畑／巧みな溶岩地形の活用

福江島の溶岩台地上（主に三井楽、富江、崎山）には、楕円形を主とした不整形の畑地の区画が目につく。地元で円畑と呼ばれる（写真 2-31・2-32）畑地の形状である。福江島の玄武岩質の溶岩台地上によく見られる円畑の形状の起源については諸説あるが、なだらかな溶岩台地を牛馬の使役により丸く開墾・耕作した名残とも、地表流の線形に影響されたともいわれている。畑と畑の間（隙間）は、排水路として利用されている箇所もあり、結果的に、円畑が築かれることにより、洪水調節機能や土壌侵食防止などの機能が備わっているとされる。さらに三井楽では円畑のまわりに防風林として椿が植栽され、椿の実が収穫されている。

以上のように、福江島の溶岩台地上の円畑は、人々が生業・生活を営む上で、特異な地質・地形を巧みに利用し、築き上げた五島独特の文化的景観である。



写真 E-31 三井楽円畑



写真 E-32 崎山円畑

（２）遣唐使関連史跡について

8世紀初頭、遣唐使船の航路が、それまでの朝鮮半島経由の航路（北路）から東シナ海を横断する航路（南路）に変更となった。五島列島は、日本の最西端にあり大陸に一番近い地理的環境であること、リアス海岸を呈している場所が多く、深い入江が湾の奥深くまで入り込んでいるため天然の良港が各島に所在していたことから、東シナ海を一気に横断する直前の最終寄港地として利用されてきた。



写真 E-33 遣唐使船の寄港地（川原の浦）



写真 E-34 遣唐使船を繋いだ「ともづな石」

このように、五島列島は、遣唐使船の寄港地をはじめ、中世末～近世初頭に至るまで、大陸との交易で利用されてきた港（湾や入り江）があり、現在でも重要な港湾として利用され続けている。（写真 E-33）

（３）奈留島の江上集落（潜伏キリシタン関連遺産）

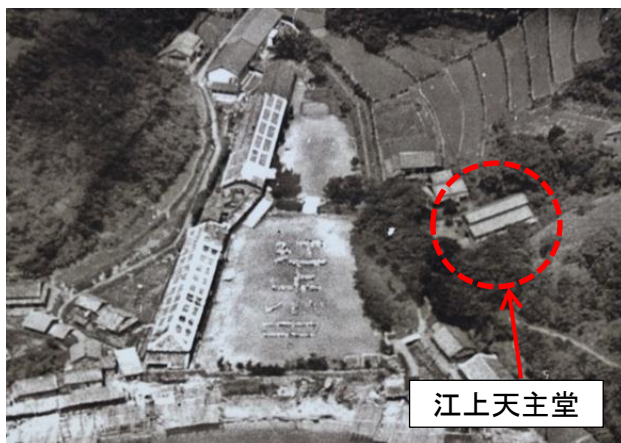
世界文化遺産の構成資産の一つである「奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）」が所在する奈留島は、細長い半島が四方に延び、その半島の両側（東西）は、小河川の侵食作用により狭隘な谷迫地形が形成され、下流域にはごく小規模な沖積地が形成され独特の

文化的景観（集落景観）となっている。このような場所は、やがて前面の湾に入り込む沿岸流の運搬作用により、河口付近に砂州が形成され河口を塞ぐかたちとなり、後背湿地やラグーンを形成してきた。



写真E-35 世界遺産「奈留島の江上集落」

※潜伏キリシタンは、このような狭隘な谷地形の場所に移住してきた



写真E-36 1961年当時の江上集落

※江上天主堂の背後に段々畑が築かれているのが分かる

複雑な海岸線は、湾が深く入り込むことになり、古来より天然の良港として利用されてきた。陸域においては、平野部が極端に少なく、集落が築かれる場所が限定され、生業を営む居住に適した島とは決して言えない環境にあった。

そのような中、島内各地に多く点在する谷地形の場所は、近世まで未開拓地として残されていたが、18世紀末以降の潜伏キリシタンの移住で転機が訪れた。

潜伏キリシタンが、未開拓地に移住し、砂州上または谷間の山腹に段々畑や居住地を形成し、後背湿地やラグーンを水田地へ

と開墾していったことにより築かれた集落の景観は、独特の景観を有している（写真E-36）。

なお、江上天主堂は、潜伏キリシタンが地元の漁師とキビナ漁の共同作業に従事するなどして資金を捻出し建設された。また、「つきあげ」「ふくれもち」などの食生活も現在に伝わっている。

（４）溶岩（玄武岩）を利用した生活

五島列島最大の島である福江島においては、火山活動によって形成されたなだらかな溶岩台地等が各所に広がる。人々は、溶岩台地を開墾する際に露出した溶岩礫を、様々な生

業・生活の場面で用いて生きた。

【福江地区】

鬼岳火山群により形成されたなだらかな溶岩台地は、鬼岳を中心にその裾野に広がっており、その大部分が肥沃な耕作地となっている。集落は裾野の末端部に近い海岸付近に築かれ、開墾時に露出した溶岩礫などを畑の土留め用の石垣や集落内の防風垣などに利用し、独特の石積み景観を形成している。

鬼岳北部の大津地区では、鬼岳からの伏流水が湧き出る箇所（地元で「カワ」と呼称）が点在し、人々はこれらの「カワ」を日常生活における「洗い場」として整備・利用している。



写真 E-37 石田城の石垣



写真 E-38 パン皮状火山弾

石田城（福江城）は、五島藩藩主五島氏の居城で、幕末の文久3年（1863年）に完成した外国船対策として築城された日本最後の城である。かつては、城の三方を海に囲まれた、我が国でも珍しい海城であった。

城壁の石垣は野面積みで堅牢な構えであり、鬼岳火山群起源の玄武岩質の溶岩を主に用いて造られ、現在も大部分が築城当時のままに残っている。石積の玄武岩の中には周りがパン皮状にはがれた火山弾もある。

石田城の城下町に築かれた武家屋敷通りの石垣についても同様で、溶岩塊の石垣を積み上げ、その上にこぼれ石といわれる円礫を積み重ね、両端は蒲鉾型の石で止められている。

【富江地区】

富江地区における溶岩礫の特異な利用法を示す例として、石蔵がある。これは、露出した溶岩礫を農作業の倉庫、あるいは石積みのカンコロ棚として利用してきたものであり、富江地区にしか見られない生活・生業上の構築物である。このような溶岩礫を利用した構築物は富江五島家の陣屋敷でも見られ、藩政時代の代表的な遺構である陣屋石蔵は、屋根部を除き良好に残されている。富江南部の山崎地区に所在する山崎の石罫^{※1}も溶岩



写真 E-39 陣屋石蔵

礫を積み上げて構築しているという点においては、当該地域の風土により形成された景観の重要な構成要素と位置づけることができよう。



写真E-40 農作業用の倉庫



写真E-41 カンコロ棚



写真E-42 倉庫

※1…山崎の石塁は、通称「勘次ヶ城」とも呼ばれ、松浦党や倭寇などの居城であったともいわれている。

【三井楽地区】

三井楽地区の塩水集落の海岸には、溶岩礫を転用して石干見（いしひび）※²が造られている。これは、底部の幅約1.5m、高さ約1mの石垣を80mにわたって築いたもので、かつてはアオリイカやメジナなどが漁獲された。

同様の石干見は富江地区の海岸にも復元され、体験学習の場として利用されている。



写真E-43 三井楽のスケアン

※2 石干見とは、干潟などの遠浅の海岸に石を積み上げ、潮の干満の差を利用して石積みの内側に取り残された魚介類を捕る伝統的な漁法、及びそれに用いられる石積み。地元では「スケアン」と呼んでいる。

E.2.3 無形遺産

申請地域にある無形遺産としては、次のものがある

▽指定文化財（無形文化財）

- ・下崎山のヘトマト行事（国指定重要無形民俗文化財、昭和62年1月8日）、
- 五島神楽（国指定重要無形民俗文化財、平成28年3月2日）など、無形文化財12件

申請地域の伝統的な漁法、大地の恵み、伝統文化と祭礼、伝説・口碑伝承について紹介する。

（1）海流の恵み

五島列島の近海には、マグロ（シビ＝若魚）、ブリ、メジナなどの回遊魚が近づくため、それら回遊魚を対象とした伝統的な漁法が主に福江島各地で行われていた。

特にメジナ（五島では、「クロ、クロイヨ」と呼称）、キビナゴを対象とした伝統的な漁法としては、山の中腹や高台に見張り小屋（番小屋）を建て、「山見」と呼ばれる役割の人物が、メジナ、キビナゴの魚群を見つけて山の上から指示を出し、地曳き網や追い込み漁

で一網打尽にする漁法がおこなわれていた。現在のキビナゴ漁は、漁獲手段の近代化により、地引き網漁から、沖合での刺網漁へと変化している。

福江島北西部に所在する三井楽町高崎集落の「クロ追い込み漁」はよく知られる伝統的漁法の1つで、三井楽半島の沖合に回遊してくるクロの魚群を高台の魚見櫓から察知し、陸で待機する漁民団に知らせ、クロの回遊する方角にあわせ魚見櫓から手旗信号で指示しながら網を入れて一網打尽に漁獲していた。

これは、玄武岩質溶岩海岸と海底の白砂のコントラストが魚群を発見できる環境となっていたのであり、まさに大地と海の恵みが融合した伝統的な漁法といえる。

また、遠浅の海岸で干満の差を利用して石垣を築く石干見漁業（スケアン）もあり、リアス海岸の優位性や浅い海の広がりや石の集積のような海岸地形をうまく活用した古くからの沿岸漁法がある。

以上のように五島列島近海には、特異な地質・地形と地形に影響された海流により、豊かな漁場が形成され、様々な魚種が回遊し、地域によって独特の伝統的な漁法が営まれてきた。まさに大地と海の恵みが融合した無形遺産である。



写真 E-44 三井楽町高崎の魚見櫓

（２）大地の恵み

かつて、五島列島における主要な農作物と言えば、サツマイモ（甘藷）であった。

福江島を除けば、まとまった平地が少なく、痩せた急傾斜地の多い五島列島でも育つサツマイモは、台風の被害にも強いため、五島列島を代表する農作物であった。

サツマイモは、食べ方や使われ方が多種多様な作物であるが、五島列島において代表的な食べ方の1つが「カンコロもち」である。

カンコロもちは、サツマイモを薄く切って風乾燥したものを餅と一緒に固めたもので、もともとは冬場の非常食、保存食であったが、今では、五島列島を代表する特産物及び長崎県特産品として島内や県内各地で製造・販売されている。乾燥させるために島内各地に作られる「カンコロ棚」は、五島の初冬の風物詩でもある。



写真 E-45 カンコロもち



写真 E-46 カンコロ棚

五島列島の中でも平地が極端に少ない奈留島においては、農業と言えば、山裾から山腹の急傾斜地に狭い段々畑を築いて、主に甘藷（七福芋）を栽培していたが、この芋の生育には「痩せた土地」が適しているため、国内で生産している地域はまれであった。

昭和 40 年代以降、奈留島においては、漁業によって現金収入が得られるようになり、この七福芋は生産されなくなっていった。しかし、近年、奈留島の地域おこしを目的に、かつて奈留島の食文化の中心であった七福芋の希少性と高い糖度に着目し、カンコロもちや芋焼酎などの生産、加工、販売を目指す試みが始まっている。



写真 E-47 七福芋

（３）伝統文化と祭礼

五島列島では、漁業と農業が同時に成り立つことから年占行事の民俗行事・祭礼が多く伝承されている。特に五島列島各地で伝承されているのが綱引き行事であり、集落を二手に分け、豊作と大漁を占う。離島という環境に育まれた半農半漁という生業活動に色濃く影響を受けた祭礼行事といえる。

このように豊漁や五穀豊穰を祈願する祭礼としては、全国的に神楽が知られているが、五島列島各地でも「五島神楽（国指定重要無形民俗文化財）」が伝承されている。五島神楽は、伝承地ごとに舞の仕方が違っており、漁業、農業に関係の深い舞が継承されているのが五島神楽の特徴となっている。

8 月 15 日のお盆の時期には、五島列島各地で念仏踊りが行われる。念仏踊りの呼称は、「チャンココ」「オネオンデ」「カケ踊り」「オーモンデー」「カインココ」など各地で様々である。

これらの念仏踊りは、平安後期から鎌倉時代に西日本を中心に広まっていった念仏踊りの名残を示すものである。歌詞や踊り手の衣装も様々であるが、共通するのは、頭に花笠（はながさ）または陣笠を被り、腰には腰蓑を巻き付け、肩から提げた腰太鼓を打ちながら円形で踊る。楽器は 2 人持ちの重鉦（おもがね）と小鉦で構成する。腰蓑の原料は、湿地に育つサンカクイと呼ばれる湿地性植物の一種で、イグサに似る多年生の草



写真 E-48 五島神楽



写真 E-49 チャンココ

本植物である。

サンカクイは、池や湖沼の周辺や汽水域に近い河川の下流域などの湿地に繁殖するが、このような場所は全国的に護岸整備などで急速に減ってきているものの、福江島や久賀島などでは随所に残されている。このことから、五島列島に伝承されている伝統的な民俗行事は島の豊かな自然環境と密接に結びついている無形遺産といえる。

（４）伝説・口碑伝承

島内で語り継がれる伝説や口碑伝承の中には、大陸や地殻変動との繋がりを示すと思われるものがある。特に有名なのが久賀島に伝わる「高麗島伝説」で、地蔵の顔が赤くなったら島が沈むという言い伝えを信じず、地蔵にいたずらをしたことで島が沈んだとされる伝説である。

久賀島の蕨集落は、高麗島から逃げ延びた人が移住した集落であるといわれ、島が沈む際に持ち運んだという高麗地蔵（首長地蔵）が、今でも蕨集落の人たちに大事に祀られている。

高麗島があったと言われている場所は、五島列島西方沖に所在する「高麗曾根」とよばれる岩礁があり、五島近海における絶好の漁場となっている。付近では、今なお陶器類が底引き網にかかり、引き上げられることもあるという。

また一方では、この島から逃れてきた牛の上陸した場所と言われるのが、福江島北西部の三井楽町高崎地区であり、高崎地区内には「五島高来」という「高麗島」若しくは大陸や朝鮮半島との繋がりを示すような字名が残されている。



写真 E-50 久賀島蕨集落で祀られている高麗地蔵

E.2.4 気候変動と自然災害への関わり

申請地域における近年の大きな自然災害としては、昭和 42 年の集中豪雨による水害があるが、その後の福江川の直線化と拡幅によりこの地区の水害はなくなった。他には、昭和 62 年の台風などがあげられる。

申請地域を震源とする地震の記録は無く、活断層もない。なお、福江火山群は約 2300 年前に噴火の記録があり、長崎県内に 2 つある活火山のうちの 1 つである。市民向けの講座やジオツアーにおいては、五島列島の活火山についての認識を促している。

このようなことから、特に気候変動や自然災害に脅かされているサイトというものはない。

なお、富江の井坑（いあな）では、風化により溶岩トンネルの崩落の危険性があるため、立入禁止となっている。

E.3 管理運営

(1) 運営計画

五島列島ジオパーク推進協議会では、行政・関係団体・住民が一体となって取組みを進めるため、「五島列島ジオパーク構想基本計画」を策定している。計画期間は平成 31 年度から 5 年間とし、必要に応じて随時見直しを行う。

(2) 運営体制

運営組織である「五島列島ジオパーク推進協議会」は、行政機関をはじめ関係団体、住民代表、民間活動団体で構成している。

事務局は、五島市政策企画課ジオパーク推進班に置き、事務局長、事務局員 4 人、専門員 1 人を配置している。

No.	名前	雇用	任務	専門	%時間	性別
1	小田 昌広	常勤	事務局長		30%	男
2	松崎 義治	常勤	事務局員	考古学	50%	男
3	唐津 博孝	常勤	事務局員		100%	男
4	岩田 晃一	常勤	事務局員		100%	男
5	細田 一郎	常勤	専門員	古生物	100%	男
6	安念真理子	非常勤	事務局員		100%	女
7	出口 敏也	嘱託	ビジターセンター	野鳥	40%	男
8	磯野 義信	嘱託	ビジターセンター		40%	男
9	神宮司真人	嘱託	ビジターセンター		40%	男
10	永治 克行	ボランティア	五島自然塾	まちづくり	30%	男
11	平田甚一郎	ボランティア	五島自然塾	地形地質	10%	男
12	遠藤 和敏	ボランティア	五島自然塾	地質調査	10%	男

(3) 予算

協議会予算は、初年度（平成 29 年度）300 万円を五島市からの負担金を受けて活動を開始した。その後、平成 30 年度 830 万円、平成 31 年度 830 万円の予算を確保している。なお、この予算には人件費、職員旅費、看板類の整備費などは含まれていない。

また、将来的には自主財源の確保を検討していく。

(4) 運営に関わっている女性

学識顧問 : 九州大学大学院准教授

協議会委員 : 五島市おもてなしガイド連絡協議会会長

協議会幹事会委員 : 五島市観光協会事務局長、県五島振興局総務課長

協議会事務局 : 事務局員（1 人）

E.4 重複（オーバーラッピング）

申請地域内には、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産である「久賀島の集落」と「奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）」が所在する。

この「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、17 世紀から 19 世紀までの 2 世紀以上にわたるキリスト教禁教政策の下で、ひそかに信仰を伝えた潜伏キリシタンの歴史を物語る遺産である。

「久賀島の集落」は、潜伏キリシタンが五島藩の開拓移民政策に従い、未開拓地に移住して自らのかたちで信仰を続けた集落である。久賀島へ移住した潜伏キリシタンは、在来の仏教集落から離れた場所を開拓して集落を形成する一方、農業や漁業などの作業を共に行うことで仏教集落との住民とも互助関係を築き、密かに自らの信仰を続けた。

「奈留島の江上集落」は、潜伏キリシタンが島の狭い谷間に移住し、その地勢に適応しながら自らのかたちで信仰を続けた集落である。奈留島内の既存の集落から離れた江上地区に移住した潜伏キリシタンは、海に近い小規模な谷間の斜面に居を構え、僅かな平地を稲作地として開墾するとともに、漁業などで生活を営み、自らの信仰を組織的に続けた。解禁後、江上集落はカトリックへと復帰し、1918 年になって、キビナゴ漁によって蓄えた資金を元手として、湧水に恵まれ防風に優れた谷間に開けた僅かな平地を利用して教会堂を建てている。

江上集落は、潜伏キリシタンが信仰を続けるために五島列島へ移住し、移住先として選択した地勢の典型例である谷迫地形及びそれに適応した伝統的な建築技術・工法に基づく風土的特徴とカトリック教会としての西洋的特徴との融合がもたらした木造教会堂の代表例である江上天主堂を含む範囲を資産範囲としている。

以上のように、申請地域内にある世界文化遺産は、キリスト教禁教政策の下でひそかに信仰を伝えた潜伏キリシタンの歴史を物語る遺産であり、ジオパークとは性格が違う。

しかし、潜伏キリシタンが移住した地は、平野部が極端に少なく、生業を営む居住に適しているとは決して言えない環境であり、近世まで未開拓地として残されていた場所である。潜伏キリシタンは、その未開拓地で、砂州上又は谷間の山腹に段々畑や居住地を形成し、後背湿地やラグーンを水田地へと開墾していった。移住した潜伏キリシタンによって築かれた集落の景観は、独特の景観を有している。

潜伏キリシタンが作り上げた集落が元々どのようにしてできた地形だったのか、五島列島の成り立ちからも知ることができる。世界文化遺産を目的に訪れた観光客に、その集落景観の基となる地形や五島列島の成り立ちを伝えることは、より広く五島列島に関心を持ってもらうことにつながる。

E.5 教育活動

学校教育

協議会では、小学校での理科教育及び高等学校でのふるさと学習などに取り組んでいる。

特に、「大地の成り立ちと変化」に関しては、野外観察などを行い、身近な地学的な事物・現象を観察させる。それらの記録を基に岩石、地層、地形などが長大な時間を経て形成されることを扱い、地学的な事物・現象を時間的推移の中で追求したり、空間的な広がりの中でとらえたりする見方や考え方を養うこと。また、その形成の過程で生じた変動の様子を、現在起こっている火山活動や地震と関連付けてみる見方や考え方を養うことを目標としている。

▽小学校

5年「流水の働き」、6年「地層、岩石、火山活動」では、地域教材として五島列島の画像や採集した岩石を提示している。また、各学校で岩石園をつくり、五島列島内で採集した岩石を展示している。

なお、五島市立盈進小学校では、ジオパーク専門員により、学校近くの海岸での地層観察、校庭の岩石園での岩石判別などの授業を行った。

これがきっかけとなり、6年生は卒業制作として岩石の新しいネームプレートを作成し、校庭の岩石見本園が復活した。（平成30年度）



写真 E-51 「岩石」の授業

▽中学校

地学分野で、五島列島内の地形や地層を画像で提示し、採集した岩石を展示している。

▽高等学校

総合的な学習であるふるさと学習において、五島列島の生い立ちを学んでいる。なお、長崎県立五島海陽高校では、「ふるさとの未来を担う高校生育成事業」の平成30年度 of 取り組みとして、ジオパーク活動に関する出前講座を開催した。平成31年度からは、年間を通しての学習が予定されている。

▽長崎大学教育学部での取り組み

- ・教員の理科学習に対する資質能力を高めるCST事業

五島の地質・地形を観察し実践を積んで資質能力を高めるとともに資料を教材化して授業に生かしている。

- ・五島の地質調査を定期的実施し、理科教員養成の資質能力を高めて大学での授業だけでなく五島の教員にもその研究内容を提供している。

社会教育

社会教育活動における取組としては、鑑瀬ビジターセンターでの野外観察会のほか、公民館講座などで五島列島の成り立ちやジオサイトなどの解説、体験ジオツアー、既存のイベントと連携した事業を行っている。

また、五島自然塾と連携し、各地区（旧町）に自然や文化に関心のある住民が集まった「地域自慢放談会」を開催している。地域自慢放談会では、住民から地元の風習や生活の知恵などが語られ、地質や地形との結びつきで説明できる場面もあった。これらの情報は、ジオサイト候補地の解説パネルの作成に活用している。



写真 E-52 観察会の様子

E.6 ジオツーリズム

地域住民に向けた取組みとして、協議会発足前は、五島自然塾による現地探訪会、鑑瀬ビジターセンターや各地区のまちづくり協議会による観察会などが行われていた。

協議会発足後は、ジオパーク活動の周知と住民の理解を促すため、ガイド付きのジオツアーを実施している。また、ジオツーリズムに不可欠なガイドの育成も実施している。



写真 E-53 ジオツアーで石蔵を見学

こうした取組により民間業者の関心も高まってきている。

一般社団法人五島市観光協会では市の委託により、地元の民宿と連携した「ガイドと行く嵯峨島クルーズ」を新たに商品化し、平成 31 年 3 月に催行した。

五島自動車株式会社では協議会の委託により、ジオガイド付きのモニターバスツアーを実施した。島内を 3 地区に分けて、計 6 回催行し、一部のコースではキャンセル待ちが出るなど、地域住民の関心の高さが窺えた。

長崎本土と五島を航路で結ぶ九州商船株式会社では、ジェットfoil便で往復の日帰りジオツアーを初めて実施し、東京、長崎から集客した。今後、世界文化遺産や五島の食などを組み合わせたコース造成を模索している。

五島列島の主な見どころは海岸が多く、なかなか近づけない場所もある。ジオパーク活動をきっかけに、このような新たな旅行商品の試行が始まっており、既存の観光地以外への誘客やクルージングなどのメニューの多様化につながっている。このことは、五島列島の新たな魅力を住民や観光客などに伝えることができ、交流人口の拡大につなげることができる。

E.7 持続可能な開発とパートナーシップ

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

五島列島の特産品となっている農林水産物は、その土地の土壌や地形など生産地としての特徴がある。その生産地の地質地形的な成り立ちや特徴を知ってもらうことで従事者の活動意欲を高めたい。これにより、ブランド化など他の産地との差別化を図り、将来にわたって持続的に産業として成り立つようにしたい。

▽椿

五島列島は、ヤブツバキの自生数が日本一である。その種子から産する椿油は、東京の伊豆諸島と日本一の生産量を競っている。(平成 29、30 年は連続日本一)

椿油は、遣隋使派遣時代以降、贈答品として文献にも残り、久賀島では椿伐採に対する禁止条例が今でも残るほど大事にされ、利用されてきた。三井楽では、冬の大陸からの北西の風に対する防風林として円畑の周囲に椿が植栽され、その副産物として椿の実が採取されている。

五島市では椿林の保全と活用推進、耕作放棄地の解消と椿林の拡大、椿を活用した新たな商品開発と販路拡大の推進に取り組んでおり、令和 2 年（2020 年）には国際ツバキ会議と全国椿サミット五島大会を開催する。



写真 E-54 椿マップ



写真 E-55 椿の実



写真 E-56 実のなった椿



写真 E-57 椿の実を干す様子

椿の生育に適した土地は、弱酸性土壌で水はけのよい緩傾斜地である。椿の生育適地を知ること、今後の椿の植栽や管理を効率的に取り組むなど、協議会とも連携できると考える。

また、椿油は、食用油や医薬品、化粧品としても価値が高いことが見直され、近年では島民や島出身者の椿に関する起業も増え、大手化粧品メーカーが五島の椿油を使った商品を出すなど、販路拡大につながる取組も見られる。

▽円畑での農業

玄武岩質の溶岩でできた三井楽半島や富江半島では、円畑と呼ばれる形態の畑が広がっている。この円畑は、緩傾斜の溶岩地形を利用し、畑の周囲に石垣を築いて土の流出を防ぎ、畑と畑の間には水路兼通路を設け、水はけをよくするなど、自然の地形や地質をうまく活用した伝統的な農地利用形態として維持されている。

この美しいモザイクの風景のユニークさと、これを長期に渡って維持してきた農家の営みが認められ、第1回風景デザインアワード2018を受賞している。

なお、済州島の溶岩台地においても玄武岩の石積など農村風景は酷似しており、同じような土地の状況から朝鮮半島で使われていた農具の鋤（すき）など、類似しているところがある。

農家の話では、円畑は畑の角がないため効率的な耕作ができ畑にまんべんなく日が当たること、周囲の石積みは大雨でも崩れず水はけが良いことなどから、円畑での農業を続ける意欲があるとのこと。協議会としては、円畑についてその地質地形的な特徴と価値を農家に伝え、耕作を続けてもらうことで円畑の維持と景観の保全につなげていく。

また、円畑で採れる大豆、麦、サツマイモなどをブランド化などが検討できると考えている。



写真E-58 円畑（富江町）

▽水産業

五島列島の海岸は、断層や海食などによってできた深いリアス海岸や、遠浅で複雑な地形の溶岩海岸など多様性に富んでいる。そこで、全国から漁業者が集まり、そのまま五島列島に住み着いた漁師も少なくない。

近年ではその地形を生かした大型魚の養殖も盛んになり、クロマグロの養殖では国内有数の生産基地となっている。

対馬海流と多様な海岸の形態があることで多種の魚介類が獲れること、海岸の地形を利用したスケ漁や地引網、深い湾を利用した追い込み漁など、地形と漁法の関連性を示すことで、五島ならではの伝統漁法を伝えていく。

また、キビナのイリヤキ、田楽など五島の郷土の食べ方で観光業とのタイアップを図るなど、伝統的魚文化の発展を目指す。



写真E-59 マグロ料理



写真E-60 クロマグロ養殖いけす

E.7.2 パートナースhip

五島列島ジオパーク推進協議会には、商工観光団体や交通機関、農協・漁協などが参画しており、ジオツアーでの船車借上げ、ノベルティグッズ作成や印刷業務など、全て地元の業者へ発注している。

これまでの取組により民間業者の関心も高まってきており、先に述べたように、一般社団法人五島市観光協会の「ガイドと行く嵯峨島クルーズ」、五島自動車株式会社のジオガイド付きモニターバスツアー、九州商船株式会社の島外客を対象にしたジオツアーなど、新たな取組が始まっている。

旅行商品以外では、五島つばき空港ターミナルビルから、空港内のスペースの貸与の好意を受け、五島自然塾と協議会で2年かけて制作していたジオ解説パネルなどを展示し、ジオパーク活動のPRに取り組んでいる。

また、NPO法人DONDON奈留は、島内のジオポイントを記した「奈留島ジオ&史跡探訪MAP」を独自に制作・配布している。

他にも、「ペレーの涙」パンや溶岩の名前のジオ菓子の販売、地元ケーブルテレビによる取材など、民間におけるジオパークへの関心も高まっている。

このような動きに対して、協議会としては、講師やガイドの派遣、ジオサイトに関する情報提供など、積極的に支援している。

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

協議会には、民間でのジオパーク活動推進団体である「五島自然塾」が参画している。五島自然塾は、協議会が発足する前から、独自に調査や研究、市民向けの講座やシンポジウムなどを開催しており、「ジオサイト候補地マップ」や冊子「知らなかった！五島の自然」を発行している。

これらの活動は、協議会発足後も積極的に行われており、地域自慢放談会や探索会などの活動は連携して取り組んでいる。



写真E-61 「五島列島をジオパークに！」シンポジウム



図E-9 マップと冊子

なお、『地域自慢放談会』は各地区で住民を対象に実施しており、地域住民からの情報収集や共同での解説パネル作成の場となっている。

また、各地区の住民で組織するまちづくり協議会が五島列島ジオパーク推進協議会に参画しているほか、独自にジオパネル展を開催したり、ジオツアーを開催している。

さらに、これまでの五島自然塾やまちづくり協議会などの活動によって、地域住民の関心は高まっており、各種団体から講座の開催や講師派遣などの依頼が増えている。

E.8 ネットワーク活動

五島列島ジオパーク推進協議会は、平成 29 年 6 月から日本ジオパークネットワークに準会員として登録され、各種大会や研修会に積極的に参加し、先進地の視察や情報交換などを行っている。日本ジオパーク全国大会では、2 年連続でポスター発表を行った。

また、九州のジオパークが集まる「九州ジオパーク連絡会」の会議や研修会にも参加し、交流を深めながらアドバイスを受けている。

平成 30 年 10 月には、韓国の済州島ジオパークに職員を派遣し、情報交換を行った。

E.9 地質鉱物資源の販売

申請地域内には、福江島に株式会社五島鉱山、枕島に株式会社真興産業が稼働する採石場がある。どちらも五島列島ジオパーク推進協議会には所属しておらず、また、当協議会は鉱物資源の販売には関連していない。

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

申請地域を震源とする地震の記録はなく、活断層もないが、福江火山群は活火山である。このため、市民向けの講座やジオツアーにおいては、五島列島に活火山があるということを意識しておいてほしいと伝えている。

また、災害対応としては、「JGN 災害対応方針」及び「JGN 災害対応方針の運用」に基づき、他のジオパークが災害を受けた場合、義援金を送るなどの対応をしている。

さらに、九州ジオパーク連絡会において、災害時の相互応援を目的としたルールが定められており、申請地域もこれに参加している。

F 日本ジオパーク認定を希望する背景と理由

五島列島ジオパーク構想テーマ

『五島列島 大陸との懸け橋』

～大陸とのつながりを、大地・生態系・歴史文化から感じよう～

【背景】

五島列島は、日本列島の西端に位置する地理的環境から、古来より大陸との交易や文化的交流の中継地であった。地学的に見れば、五島列島は、大陸起源の大河から運搬された砂泥の堆積により形成された「五島層群」と、その五島層群の断層線周辺で起きた火山の噴火により成り立っている。私たちが生まれ育った五島列島は、まさに日本と大陸との「懸け橋」的存在とも言える島々なのである。

五島列島の各地に顕著に見られる五島層群は、日本海形成時の記録を残す自然遺産であるが、これまで、研究機関などによる地学調査・研究は十分とはいえない状況であった。

地域の自然・歴史文化資源などを保全していくのは、地域に生きる人々であり、五島の資源を将来にわたって保全していくためには、地域活力を取り戻す必要がある。そのためには、地域住民の郷土に対する郷土愛の醸成が必要不可欠である。

このような喫緊の課題に対し、五島列島の豊かな地域資源の持つ価値を理解し、保全と活用が取組が住民から盛り上がることでこそ、最善の策と考える。数年前よりその民間からの声が強くあがり、自主的な活動が続けられてきた。平成 29 年に五島列島ジオパーク推進協議会の発足後は、民間の自主活動も大きく広がり、観光団体や交通機関の自主的なジオツアーの試行も始まっている。さらに、教育機関や公民館などのジオ学習も始まっている。

近年になり九州大学などの研究機関が五島列島の地質調査や地形利用などの調査を進めていることと、協議会発足により行政と民間が一体的に取り組める体制ができたこともあり、今こそが日本ジオパークに立候補すべき時と考える。

【理由】

①住民が郷土に愛着を持つ

五島列島の成り立ちを学ぶことで、私たちの生活や歴史文化の成り立ちを知ることができる。地域の自然や歴史文化を住民がより深く知ることは、住民の誇りや郷土愛の醸成につながり、自ら郷土を守り育て、自ら子どもたちや来島者へ伝え続けていくことにつながる。

日本ジオパークに認定される事は、地域住民を始め来島者にも五島列島の自然や歴史文化の素晴らしさを再認識させる事ができ、郷土の地質学的な遺産が評価されたという誇りを持てるようになる。また、五島におけるジオパーク活動は市民団体による活動から始まっており、「市民参加型」のジオパークの認定拡大への原動力となるほか、市民団体の活動のモチベーションを上げることができる。さらに、五島列島での地学教育の底上げや浸透にも貢献でき、ジオに関する人財の育成にもつながる。

②五島列島の持続発展性の可能性が増す

五島列島は、有人国境離島法に基づき指定された地域でもあり、国境に接する離島に人が継続して居住できるような施策が求められている。

これまで、五島列島では豊かな自然資源が西海国立公園や天然記念物の指定、観光景勝地として認められ、また歴史・文化的な資源が世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」や日本遺産「国境の島 壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～」など、有形無形の文化財としてその価値が認められている。

今回、日本ジオパークに認定されることにより、地学的な面からもその価値が認められることとなる。このことは、互いの相乗効果により、有人国境離島新法の理念の実現をはじめ、日本ジオパークが理念とする「地質学的遺産を保全し、教育やツーリズムに活用しながら、持続可能な開発を進める地域認定プログラム」の実現に大いに寄与する。

③五島列島の名を全国に発信

日本ジオパークに認定されることで、全国の地学研究者の注目を集めたい。今後、研究支援活動により多くの研究が行われることで、五島列島の成り立ちの解明が進むことになる。また、その知見は日本列島形成の研究への貢献につながる。

五島列島の地質地形の成り立ちや、それに伴う生態系のありよう、大陸と日本の間に存在することから育まれた歴史文化などの再発見により、五島列島の日本における重要な位置づけの認識が深まる。また、ジオパークの視点から全国への発信を行うことにより、交流人口の拡大などの地域経済にも貢献できる。